

こです HOKKAIDO 2025

(令和7年度版)

Collected papers
Domestic Science
Studies

北海道高等学校長協会家庭部会

こです HOKKAIDO 2025 【令和7年度版】

目 次

○	巻頭挨拶								
		北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校	校長	箕 浦 真 人				1
○	挨拶								
		「主体的・対話的で深い学び」の実現 ～教科等横断な取組から～							
		北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班	指導主事	荒 嘉 律 様					2
I	令和7年度北海道高等学校長協会家庭部会活動報告								
◆	北海道高等学校長協会家庭部会の組織と今年度の事業内容について								
		北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校	校長	箕 浦 真 人				3
◆	公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会及び同北海道地区校長会報告								
		北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校	校長	箕 浦 真 人				5
◆	令和7年度 全国福祉高等学校長会理事会並びに総会報告								
		全国福祉高等学校長会北海道地区理事							
			北海道留寿都高等学校	校長	治 田 理 知				7
◆	北海道高等学校家庭科教育研究協議会企画委員会報告								
1	第74回北海道高等学校家庭科教育研究協議会を終えて								
		北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長							
			市立函館高等学校	校長	佐 紺 撰 子				8
2	オリエンテーション								
		北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長							
			市立函館高等学校	校長	佐 紺 撰 子				10
3	研究発表								
□	提言1	食を通じた表現力の育成を目指して ～「ばん馬」を題材としたキャラ弁制作の実践～							
			北海道千歳高等学校	教諭	飯 田 怜 奈				12
□	提言2	家庭・地域と連携した授業の指導と評価の工夫と改善 地域と連携した「家庭総合」の授業～認定こども園での実習を通して～							
			北海道根室高等学校	教諭	薬 師 寺 諄				13
4	分科会報告								
□	第1分科会		北海道稚内高等学校	教諭	武 石 彩				14
□	第2分科会		北海道北見工業高等学校	教諭	百 井 ひらり				15
5	第74回北海道高等学校家庭科教育研究協議会 講評								
		北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班	指導主事	荒 嘉 律 様					16
6	グループ別体験研修報告								
□	A 食生活セミナー		北海道鹿追高等学校	教諭	平 澤 朋 子				17
□	B 介護福祉セミナー		北海道稚内高等学校	教諭	武 石 彩				18
□	C 住生活セミナー		北海道札幌啓成高等学校	教諭	米 根 順 子				19

□ D	ICTセミナー	北海道北見工業高等学校	教諭	百井ひらり	20
◆	北海道高等学校長協会家庭部会 調査研究委員会報告 「北海道の家庭科教員の抱える現状と課題」 北海道高等学校長協会家庭部会調査研究委員長	北海道札幌丘珠高等学校	校長	能登啓児	21
II 令和7年度北海道高等学校家庭クラブ連盟活動報告					
1	北海道家庭クラブ連盟の活動について 北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長	北海道札幌北高等学校	校長	佐賀聡	25
2	第66回全国高等学校家庭クラブ指導者養成講座に参加して 北海道当別高等学校	教諭	伊藤恵里香	26	
3	第73回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会北海道代表出場校として				
□	ホームプロジェクト活動の部	北海道江別高等学校	教諭	山田真規子	27
□	学校家庭クラブ活動の部	北海道札幌北高等学校	教諭	松本奈巳	28
4	第74回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会を終えて 令和7年度北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会担当校	北海道札幌北高等学校	教諭	松本奈巳	29
III 令和7年度北海道家庭科技術検定委員会活動報告					
1	家庭科技術検定の実施について 北海道高等学校家庭科技術検定委員会委員長	北海道当別高等学校	校長	保格秀規	30
2	家庭科技術検定全国専門委員会に参加して				
□	全国専門委員会（被服）	函館大妻高等学校	教諭	笹森美絵	31
□	全国専門委員会（食物調理）	北海道当別高等学校	教諭	伊藤恵里香	32
□	全国専門委員会（保育）	函館大妻高等学校	教諭	藤野可那	33
3	令和7年度北海道高等学校家庭科技術検定評価研究協議会・検定委員会養成講座実施報告 北海道当別高等学校	教諭	伊藤恵里香	34	
IV 家庭科教育に関する報告					
1	第13回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会を開催して 北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会事務局	北海道江別高等学校	教諭	鈴木朋美	35

2	第13回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会に参加して								
	□ 発表校《総合学科》	発表者	北海道清水高等学校	1年	奥田杏				
		指導者	北海道清水高等学校	教諭	柏倉早智子				36
	□ 発表校《家庭部会》	発表者	北海道当別高等学校	3年	福島李理				
		指導者	北海道当別高等学校	教諭	磯部幸恵				37
	□ 発表校《福祉部会》	発表者	北海道置戸高等学校	2年	高橋彩那				
		指導者	北海道置戸高等学校	教諭	三好菜穂子				38
3	北海道高等学校教育研究大会家庭部会に参加して								
			北海道石狩翔陽高等学校	教諭	北村仁美				39
4	初任段階教員研修Ⅰ年次研修（高等学校）に参加して								
			北海道三笠高等学校	教諭	茂木優奈				40
5	中堅教諭等資質向上研修（高等学校）に参加して								
			北海道網走南ヶ丘高等学校	教諭	安田三奈				41
6	令和7年度産業・情報技術等指導者養成事業に参加して								
			北海道江別高等学校	教諭	狩野千賀子				42

V 福祉教育等に関する報告

1	第23回「福祉に関する教科・科目設置校研究協議会」を終えて								
	第23回「福祉に関する教科・科目設置校研究協議会」当番校								
			北海道留寿都高等学校	校長	治田理知				43
2	第10回北海道地区高校生介護技術コンテストを開催して								
	第10回北海道地区高校生介護技術コンテスト当番校								
			北海道置戸高等学校	教諭	大森涼太				44
3	第12回全国高校生介護技術コンテスト優秀賞、全国福祉高等学校長会理事長賞を受賞して								
	第10回北海道地区高校生介護技術コンテスト最優秀受賞校								
			北海道留寿都高等学校	教諭	山形孝宏				46

VI 各地区（ブロック）家庭科研究会の一年間の活動状況

1	空知管内	2	石狩管内						47
	北海道滝川高等学校		北海道札幌南高等学校						
3	後志管内	4	胆振管内						48
	北海道蘭越高等学校		北海道登別明日中等教育学校						
5	日高管内	6	渡島・檜山地区						49
	北海道静内農業高等学校		北海道函館商業高等学校						
7	上川・名寄地区	8	留萌管内						50
	北海道美瑛高等学校		北海道羽幌高等学校						
9	宗谷管内	10	オホーツク管内						51
	北海道礼文高等学校		北海道大空高等学校						
11	十勝管内	12	釧根地区						52
	帯広大谷高等学校		北海道阿寒高等学校						

VII 特別寄稿

◆	不易と流行								
	～家庭科教育の歴史と日本文化の継承～								
			北海道野幌高等学校	校長	壽淺章洋				53
○	編集後記								
			北海道当別高等学校	校長	保格秀規				54

巻 頭 挨拶

北海道高等学校長協会家庭部会長
北海道江別高等学校長 箕 浦 真 人

日頃から、北海道高等学校長協会家庭部会の活動に対し、多大なる御協力と御支援を賜り、感謝申し上げます。

当部会は、家庭科教育及び福祉科教育の振興を図ることを目的とし、活動しております。今年度は、全道 191 校の加盟をいただき、事業については、各校の御協力により、ほぼ計画通りに実施することができました。生徒が活動に取り組む真摯で澁刺とした姿、そうした生徒を支え、見守る先生方の献身的な姿を見ることができ、部会として大変うれしく思います。

北海道教育委員会、北海道高等学校長協会、加盟校の皆様はもとより、多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに、改めてお礼を申し上げます。

さて、現行学習指導要領は、変化が激しく予測がつかないとされるこれからの社会を生き抜いていく子どもたちが、未来の社会を切り拓くための資質・能力を確実に育成することを目指しています。学校では、ともすると、教師が主体、教師主導といった考え方（慣習、文化）が陰に陽に根強く、指導と言いつつ「覚えさせる」ことに終始してしまう授業もあるのではないのでしょうか。

しかし、現行学習指導要領では、主語を生徒とし、各教科・科目において「（生徒が）理解する、技能を身に付ける、課題を設定する、構想する、協働する、実践的な態度を養う」などの目標を掲げ、教師が指導すべき項目は、そうした資質・能力を養うためのものとして示されています。

生徒に資質・能力を身に付けさせるためには、学校は社会から閉ざされた存在となるのではな

く、学ぶ内容も学び方も実社会とのつながりを持った「社会に開かれた教育課程」のもと、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」や、学校や教師による適切な「カリキュラム・マネジメント」が求められています。

家庭科は、生活の中から問題を見だし、課題を設定し解決する力や、よりよい生活の実現に向け生活を工夫し創造しようとする態度等を、福祉科は、福祉に関する課題を発見し、合理的かつ創造的に解決する力や、よりよい社会の構築に向け福祉社会の創造と発展に主体的かつ協働的に取り組む態度等を、両教科とも実践的・体験的な学習活動を通して育成することが求められており、実社会及び将来の社会とつながり様々な人々と協働する力の育成に向けた学びが期待されています。

授業においては、単元を通して育成する資質・能力の明確化、意欲を引き出し学びの導きとなる発問や生徒が主体となる展開、授業改善につながる学習評価等、求められることが多々ありますが、教員としては腕の見せどころであり、家庭科だからこそ、福祉科だからこそできることがあると思います。

家庭科教育及び福祉科教育は、生徒たちが生涯にわたって学び続けながら、社会を切り拓く力を身に付けていく上で重要な役割を果たします。当部会におきましては、両教科の充実につながる活動に引き続き取り組んでまいります。

今後とも、当部会に対する御支援、御協力をお願い申し上げます、巻頭の御挨拶といたします。

【家庭部会ホームページ】

<https://www.do-kateibukai.hokkaido-c.ed.jp>

「主体的・対話的で深い学び」の実現

～教科等横断な取組から～

北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班
指導主事 荒 嘉 律

令和4年度（2022年度）入学生より実施されている現行学習指導要領は、今年度で4年が経過したところですが、既に次期学習指導要領に向けて、昨年9月25日に中央教育審議会教育課程企画特別部会から、次期学習指導要領に向けた論点整理が示されました。また、12月25日には、教育課程部会家庭ワーキンググループから、次期学習指導要領に向けた「家庭科の資質・能力の育成及び高校の科目構成の在り方について」も公表されています。

主体的・対話的で深い学びについては、次期学習指導要領の検討においても基盤となる考え方になっており、引き続き、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んでいく必要があります。

道教委では、今年度、生徒が探究の過程において、各教科等の特質に応じた見方・考え方を総合的・統合的に働かせることができるよう、教員対象のセミナーを開催し、授業改善に資することを趣旨として、BRIDGE構築事業「教科等横断」推進プロジェクト探究型学習実践事業を実施しております。家庭科では公民科「公共」の「地方自治のしくみと住民の福祉」の学習において、家庭科の視点から展開する「教科等横断」な取組を行いました。参加された先生方からは、「探究的な学び」「主体的・対話的で深い学び」について「深まった」、また「自らの授業において活用できる」という感想をいただきました。地理歴史・公民科の先生からも「家庭科の『生活者としての視点』を公民科に加えることで、生徒が学習内容を身近に感じることができるのではないか」との意見があり、家庭科という教科が他教科と視点を交えることで、

生徒が生活者の視点をもって主体的に学習に取り組む、主体的・対話的で深い学びの実現につながるものと感じました。家庭科教諭は、各校1人の場合が多く、教科等横断的な取組は難しいと感じるかもしれませんが、他教科の学習内容について同僚教諭と話すことから始めてみてください。新しい発見があるかも知れません。

また、主体的・対話的で深い学びの実現を図る上では、学習指導要領においてもコンピュータや情報通信ネットワークなどの活用を図り、学習の効果を高めるように工夫することが示されており、一人一台端末やICTの活用が求められています。近年、ICTの技術が著しく発展している中、今年度の「各教科等教育課程研究協議会」においては、「高等学校教育課程編成・実施の手引き」を基に、共通教科「家庭」、専門教科「家庭」ともにICTの活用及び生成AIの利活用の実践例について実践事例として紹介させていただきました。道教委ホームページに掲載しておりますので、ご覧いただければ幸いです。

いずれも生徒の主体的・対話的で深い学びの実現のために必要とされておりますので、今後とも積極的な活用をお願いいたします。

先生方におかれましては、これまでも本道の家庭科教育の充実・発展に御尽力いただいていることに深く感謝を申し上げますとともに、今後とも熱意ある教科指導の中で、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた家庭科教育の実践をお願い申し上げます。

結びに北海道高等学校長協会家庭部会長である北海道江別高等学校の箕浦真人校長先生をはじめ、関係各位に深く御礼を申し上げ、御挨拶といたします。

I 令和7年度北海道高等学校長協会 家庭部会活動報告

北海道高等学校長協会家庭部会の組織と今年度の事業内容について

北海道高等学校長協会家庭部会長
北海道江別高等学校長 箕浦真人

今年度の北海道高等学校長協会家庭部会の組織、事業内容等は次のとおりです。事業の推進に御協力いただき感謝申し上げます。次年度以降も、どうぞよろしく申し上げます。

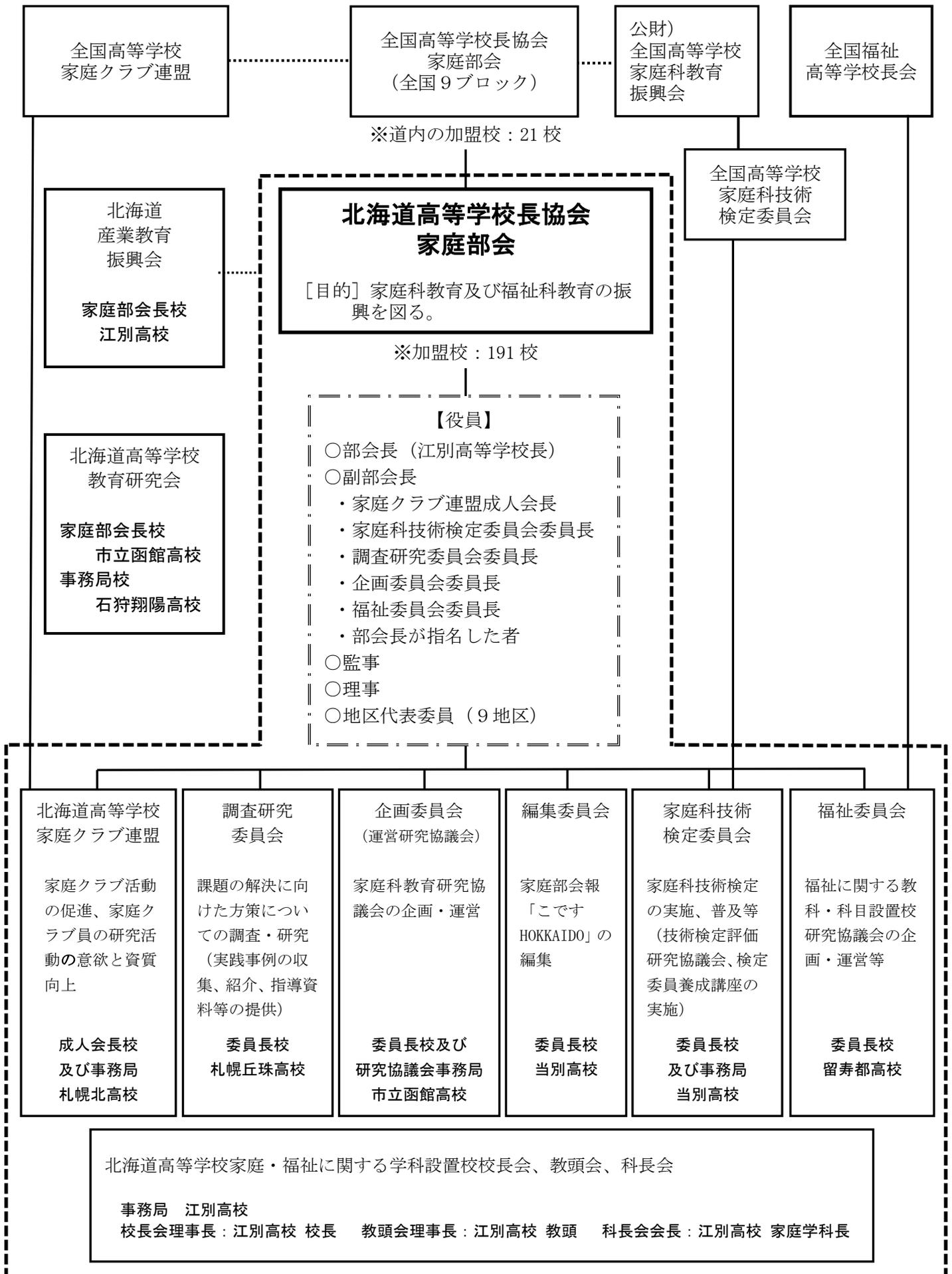
■令和7年度 部会の役員構成等

役職	校長名・学校名	兼務する役職等
部会長	箕浦真人 江別	全高長家庭部会道代表理事 全高長家庭部会常務理事 全国家庭科教育振興会理事
副部会長	佐紺撰子 市立函館	全高長家庭部会常務理事 全国家庭科教育振興会評議員 企画委員長 調査研究委員 高教研家庭部会長
	保格秀規 当別	全国家庭科技術検定代表理事 家庭科技術検定委員長 「こです」編集委員長 企画委員
	能登啓児 札幌丘珠	調査研究委員長
	治田理知 留寿都	全国福祉高校長会道理事 全国福祉高校長会特任理事 福祉委員長 調査研究委員
	佐賀聡 札幌北	全国家庭クラブ連盟ブロック代表 家庭クラブ諮問委員(全国) 道家庭クラブ連盟成人会長 「こです」編集委員
監事	壽浅章洋 野幌	企画委員 調査研究委員
	吉田拓二 千歳北陽	企画委員 「こです」編集委員 道地区代表委員(石狩)
理事	齊藤賢一 函館大妻	福祉委員 調査研究委員 道地区代表委員(道南)
	松井牧子 三笠	企画委員 「こです」編集委員 道地区代表委員(空知)
	浅井邦昭 置戸	福祉委員 「こです」編集委員 道地区代表委員(オホーツク)
	黒田祥嗣 剣淵	福祉委員 調査研究委員 道地区代表委員(道北)
他の道地区代表委員	佐々木真一 倶知安	(後志)
	奥田智紀 登別青嶺	(日胆)
	中川修司 鹿追	(十勝)
	沖野高志 釧路明輝	(釧根)

■令和7年度 部会の主な事業

月日	事業 ※ () 内は会場等
4/14	家庭科技術検定常任理事会 (当別高)
4/17	家庭部会役員研究協議会等① (ライフト)
4/24	全国家庭科教育振興会理事会 (Web開催)
5/7	家庭クラブ連盟研究協議会① (札幌北高)
5/9	家庭部会総会 (ライフト)
5/12	技術検定代表理事会 (Web開催)
5/14,15	技術検定全国専門委員会 (東京)
5/26,27	全国福祉高校長会理事等合同会議① (東京)
5/26,27	全高長家庭部会総会、振興会理事会等 (東京)
6/27	家庭科技術検定委員養成講座[被服] (江別高)
7/24,25	全国家庭クラブ連盟指導者養成講座 (東京)
7/28	家庭科技術検定委員養成講座[食物] (当別高)
7/29	家庭部会北海道地区校長会 (かでる2・7)
7/29,30	家庭科教育研究協議会 (かでる2・7)
7/31,8/1	全国家庭クラブ連盟研究発表大会 (三重)
8/5	家庭科技術検定委員養成講座[保育] (当別高)
8/6,7	全国家庭科実践研究会愛知大会 (愛知)
8/6	全国福祉高校長会理事等合同会議② (愛媛)
8/7,8	全国福祉高校長会総会・研究協議会、福祉担当教員等研究協議会 (愛媛)
8/29	北海道介護技術コンテスト (道医療大学)
9/19	家庭部会意見・体験発表大会 (江別高)
9/25,26	家庭クラブ連盟研究大会、総会 (Web開催)
10/1	高等学校産業教育意見・体験発表大会 (岩農高)
10/9,10	全高長家庭部会研究協議会(秋季) (岩手)
10/25,26	全国産業教育フェア福島大会 (福島)
11/20,21	福祉に関する教科・科目設置校研究協議会(留寿都高)
11/26	家庭科技術検定常任委員会、専門委員会(当別高)
1/8	高教研家庭部会 (札幌エルプラザ)
1/29	全国福祉高校長会理事等合同会議③ (東京)
2/3	全高長家庭部会常務理事会、振興会理事会等 (東京)
2/19	家庭クラブ連盟研究協議会② (札幌北高)
2/20	家庭部会役員研究協議会等② (ライフト)
3月末	「こです HOKKAIDO 2025」発行

令和7年度 北海道高等学校長協会家庭部会 組織図



公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会

全国高等学校長協会家庭部会 同北海道地区校長会 報告

北海道高等学校長協会家庭部会長

北海道江別高等学校 校長 箕浦 真人

I 公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会理事会

令和7年4月24日(木)13:20～15:00

(オンライン開催)

■出席者 理事 箕浦 真人(江別)

■議 事

1 事務局長の任免

2 令和6年度事業報告

(1) 公益事業

①家庭科技術検定に係る改定

・級の改定及び受検料の改定

②家庭科教育に関する調査研究

・進路調査研究委員会

家庭科設置校等対象進路状況調査・研究

・技術検定調査研究委員会

共通教科「家庭」の保育に係る指導の充実に向けた学習指導要領を踏まえた保育技術検定の在り方の研究

③研修会・講演会・研究会

・全国高等学校家庭科実践研究会

・家庭科技術検定全国専門委員会

・家庭科技術検定代表理事会

④機関誌「家庭部会報」刊行

⑤家庭科技術検定の実施

※R6 申込人数 ([] 内は前年度比)

被服製作 34,516名 [△605]

食物調理 59,268名 [△3,674]

保育 92,836名 [△3,302]

⑥家庭科教育の振興に寄与した者の表彰

・教員表彰(技術検定委員等での功績)

・生徒表彰(技術検定「三冠王」「四冠王」)

三冠王(R6:638名)、四冠王(R6:50名)

(2) 収益事業

①技術検定にかかわる教材の作成・販売

・問題集、保育技術検定過去問題集、食物調理技術検定資料集、型紙、被服製作・食物調理・保育技術検定用のDVD

②高等学校家庭科の指導にかかわる教材(「楽しく学べるマナーの基本」)の作成・販売

③その他の事業

3 令和6年度財務諸表並びに監査報告

4 特定資産の取崩し

5 顧問の選任及び解任

II 全国高等学校長協会(全高長)家庭部会

[会場:ホテルメトロポリタンエドモント]

<常務理事会>

令和7年5月26日(月)14:00～14:20

■出席者 常務理事 箕浦真人(江別)

■協 議

1 全国理事会・研究協議会の運営

2 総会・研究協議会の運営

3 家庭科調査研究委員会委員

■連絡事項

1 第134回秋季研究協議会(岩手大会)

2 第134回秋季研究協議会 研究協議提案者

3 第69回全国家庭科実践研究会(愛知大会)

4 被服・服飾デザイン系校長会

第18回総会・研究協議会並びに学科主任研究協議会(岐阜大会)

5 第35回全国産業教育フェア(福島大会)

<理事会>

令和7年5月26日(月)14:40～17:00

■出席者

常務理事 箕浦真人(江別)、佐紺摂子(市立函館)

■報告事項

1 全高長家庭部会第1回常務理事会報告

2 振興会評議員会並びに理事会報告

■協議事項

- 1 令和6年度家庭部会事業報告
- 2 令和6年度会計決算報告・監査報告
- 3 令和7年度校長功労者表彰（案）
- 4 令和7年度家庭部会役員選出
- 5 令和7年度家庭部会事業計画
- 6 令和7年度家庭部会会計予算書

<総会・研究協議会>

令和7年5月27日（火）10:00～16:00

■出席者

常務理事 箕浦真人（江別）、佐紺摂子（市立函館）

■次第

- 1 開会式
 - (1) 理事長挨拶
 - (2) 来賓祝辞
 - ・文部科学省初等中等教育局産業教育振興室長 大久保亨之 氏（※係長代読）
 - ・産業教育振興中央会専務理事 岩井 宏 氏
 - (3) 校長功労者表彰 挨拶 齋藤辰彦 氏
- 2 総会・研究協議会
 - (1) 振興会評議員会・理事会報告
 - ・令和7年度評議員、役員
 - ・令和6年度事業及び家庭科技術検定受検状況等
 - ・令和6年度収支計算書及び監査
 - ・令和7年度事業計画・収支予算書
 - (2) 協議
 - ・令和6年度家庭部会事業報告
 - ・令和6年度家庭部会会計決算・監査報告
 - ・令和7年度家庭部会役員選出
 - ・令和7年度家庭部会事業計画（案）
 - ・令和7年度家庭部会会計予算書（案）
 - 3 研究協議
 - (1) 専門教育に関する家庭科調査研究委員会
 - ・「家庭教育を通じた持続可能な社会の創り手の育成 ～令和の時代における不易と流行～」兵庫県立須磨東高等学校 若松明子 氏
 - (2) 普通教育に関する家庭科調査研究委員会

・「家庭科教育とウェルビーイング」

福島県立伊達高等学校 金成智子 氏

(3) 技術検定調査研究委員会

・「学習指導要領を踏まえた保育技術検定の在り方 ～共通教科「家庭」の保育に係る指導の充実に向けて～」

岐阜県立岐阜総合学園高等学校

片岡潤子 氏

(4) 進路調査研究委員会

・「家庭学科卒業者の進路状況調査」

千葉県立佐倉東高等学校 相澤直幹 氏

4 講演

・「AI時代におけることばの力、伝える力」
NHK財団ことばコミュニケーションセンター エグゼクティブ・アナウンサー

松尾 剛 氏

5 講話

・「学習指導要領のさらなる充実に向けて」
文部科学省初等中等教育局教科調査官
国立教育政策研究所教育課程調査官

田邊暁子 氏

Ⅲ 全高長家庭部会北海道地区校長会

令和7年7月29日（火）13:30～15:50

[会場:北海道立道民活動センター「かでの2・7」]

■出席者 校長14名、来賓1名

■ 次第

- 1 部会長挨拶
- 2 来賓挨拶
全高長家庭部会副理事長
埼玉県立鴻巣女子高等学校長 秋元俊一氏
- 3 説明
 - ・「全国の高等学校家庭科教育の現状と課題について」（秋元俊一氏）
- 4 報告
 - ・令和7年度全高長家庭部会総会・研究協議会について（部会長）
- 5 協議
 - (1) 各校の家庭科教育の現状と課題について
 - (2) その他

令和7年度 全国福祉高等学校長会理事会並びに総会報告

全国福祉高等学校長会北海道地区理事

北海道留寿都高等学校 校長 治田 理知

1 全国福祉高等学校長会 第1回理事会、理事・
学科主任代表者合同会議

令和7年5月26日（月）

於：東京都立赤羽北桜高等学校

(1) 理事会

① 今年度役員、加盟校、事業計画、予算（案）

② 前年度事業報告、会計監査報告

③ 各表彰、各大会について

③ 規約一部見直しについて 等

(2) 合同会議

① 組織分担、活動内容

② 各部会

③ 産業教育フェア福島大会

④ HP運用について 等

(3) 講演

講師：文部科学省 初等中等教育局参事官（高
等学校担当）付産業教育振興室

教科調査官 辻本 智加子 氏

2 全国福祉高等学校長会 第2回理事・学科主
任代表者合同会議

令和7年8月6日（水）

於：愛媛県民文化会館

(1) 全国大会役割分担

(2) 各部会より連絡・報告等

(3) 産業教育フェア福島大会

(4) その他 規約の一部見直しについて

3 令和7年度 全国福祉高等学校長会 第29回
総会・研究協議会並びに福祉担当教員等研究
協議会

令和7年8月7日（木）～8日（金）

於：愛媛県立文化会館

研究主題「次世代へ続く高校福祉教育」～地
域共生社会の実現に向けた福祉人材の育成～

(1) 基調講演

演題「介護人材を取り巻く状況と介護福祉士
への期待」

講師：厚生労働省 社会・援護局 福祉基盤課
福祉人材確保対策室

室長 芦田 雅嗣 氏

(2) 生徒体験発表（道内からの発表者なし）

(3) 校長会総会・研究協議会A（同展開）

(4) 記念講演

演題「アーティスト石村嘉成のキセキ」～発
達障がいのが子と歩んで～

講師：石村 嘉成 氏

（父）石村 和徳 氏

(5) 研究協議会B（パネルディスカッション）

演題「みんなで考える共存（共生）戦略」

進行：幸田 裕司 氏

パネリスト：清水 克起 氏

中田 衛樹 氏

渡辺 将斗 氏

(6) 各部会報告

(7) 指導・講評

文部科学省 初等中等教育局 参事官（高等学
校担当）付産業教育振興室

教科調査官 辻本 智加子 氏

(8) 表彰

・令和6年度卒業生優秀者表彰 北海道6名

・令和6年度全国福祉高等学校長会教職員表彰
北海道石狩翔陽高等学校

教諭 桑原 映莉子 先生

教諭 大内 亜瑞沙 先生

4 全国福祉高等学校長会 第3回理事会、理
事・学科主任代表者合同会議

令和8年1月29日（木）～30日（金）

於：新宿三井ビル2号館

第74回北海道高等学校家庭科教育研究協議会を終えて

北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長
市立函館高等学校 校長 佐 紺 撰 子

7月29日(火)・30日(水)の2日間、北海道立道民活動センター「かでの2.7」を主会場として、令和7年度第74回北海道高等学校家庭科教育研究協議会を開催しました。

ご来賓として、北海道教育庁学校教育局高校教育課長 高田 安利 様、全国高等学校長協会家庭部会副理事長 秋元 俊一 様にはご臨席ならびにご挨拶をいただくとともに、北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班指導主事 荒 嘉律 様には全体会Ⅱにおいて講評をいただきました。

北海道高等学校長協会家庭部会に加盟の校長先生方をはじめ、多数の先生方のご参加により、お陰様で盛会のうちに所期の目的を達成することができましたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。

本研究協議会は、北海道高等学校長協会家庭部会企画委員の校長5名、家庭科教頭7名、全道各地より選出された運営研究員18名、事務局(市立函館高校)3名の計33名で組織され、企画・準備・運營業務を担いました。改めまして、ご尽力いただいた皆様と、教頭先生・運営研究員の先生の派遣にご配慮いただきました関係高校の校長先生に深く感謝申し上げます。

1 全体会Ⅰ

1日目午前中は、開会式、オリエンテーションに続いて全体会Ⅰとし、今年度初めての試みとして、ジェンダーに関わる講話を取り入れました。講話後、2つの研究発表がなされました。

(1)講話について

「未来の生活者を育てるジェンダーの視点とは」と題して、札幌市男女共同参画センター係長菅原 亜都子様にご講話をいただきました。世界、日本、北海道におけるジェンダー平等の現在、



ジェンダー平等の視点・感覚が必要な理由等について、ワークショップ「ちがいのちがいがい」も盛り込みながら、時を忘れる興味深いお話でした。参加の先生方からは、「視野が広がるお話だった」「ワークショップの例は今後の授業の教材として使いたい」等の感想をいただきました。



(2)研究発表について

石狩地区から、千歳高校 飯田 怜奈先生より「外部コンテストを活用したフードデザインの授業～思考力・判断力・表現力の育成を目指して～」と題し、料理コンテストへの主体的な取組を通して、生徒の思考力・判断力・表現力を育むことを目的とした授業実践と評価について、釧路・根室地区から、根室高校 薬師寺 諄先生より「地域と連携した「家庭総合」の授業～認定こども園での実習を通して～」と題し、主に前任校での地域と連携した幼児との交流に係る授業実践と評価について発表されました。

2 校長部会・分科会

1 日目午後からは、校長先生方は、全国高等学校長協会家庭部会北海道地区校長会に参加いただき、秋元副理事長から家庭科教育の全国の現状と課題について情報提供いただきました。その後、北海道高等学校長協会家庭部会長（江別高校長）箕浦 真人校長から、「全国高等学校長協会家庭部会総会・研究協議会」等についてご報告いただき、研究協議を行いました。

先生方は、2つの分科会に分かれ、午前の研究発表を受け、思考力・判断力・表現力の評価の工夫等について活発に協議を行い、大変有意義な分科会となりました。

3 全体会Ⅱ

分科会終了後は、全体会Ⅱとして、各分科会の報告を行いました。最後に荒指導主事より、各提言内容についての講評をいただくとともに、学習指導要領の趣旨の実現に向けて説明をいただき、実り多い研究協議会となりました。

4 グループ別体験研修講座

2 日目は、カムチャッカ半島付近の地震の影響を心配しながら、グループ別体験研修講座を行いました。今年度は、A 食生活、B 介護福祉、C 住生活、D ICTを実施しました。A研修では、学校法人宮島学園北海道調理師専門学校・北海道製菓専門学校学校長 田村 中様を講師に道産食材・地産地消の調理実習、B研修では、専門学校北海道福祉・保育大学校介護福祉学科学科長 阿部 幸恵様、主任 高橋 綾様を講師に体験も含めて福祉用具について、C研修では、藤女子大学ウェルビーイング学部教授 田中 宏美様を講師に防災について、D研修では、北海道情報大学経営情報学部教授 藤本 直樹様を講師にAIについて研修を深めました。詳細は本冊子の「グループ別体験研修報告」をご覧ください。

本研究協議会が、本道の家庭・福祉の先生方にとって、さらに実り多き研修・学びの場となるよう努めてまいりますので、今後ともよろしくお

願いいたします。

【本研究協議会 組織】

1 役員

部会長	箕浦 真人 (江 別)
会長	佐 紺 撰 子 (市立函館)
副会長	保 格 秀 規 (当 別)
	松 井 牧 子 (三 笠)
監 事	壽 浅 章 洋 (野 幌)
	吉 田 拓 二 (千歳北陽)

2 運営研究員

教 頭	石 川 博 史 (室清水丘)
	上 村 晴 美 (八 雲)
	吉 村 佳名子 (芦 別)
	近 藤 麻理子 (岩見沢農)
	田 中 裕 子 (大 樹)
	山 本 昌 枝 (江 別)
石狩地区	千 葉 和 代 (上富良野)
	米 根 順 子 (札幌啓成)
	宮 田 俊 江 (札幌手稲)
	小 田 美 穂 (札幌厚別)
空知地区	北 村 仁 美 (石狩翔陽)
	山 田 真 代 (当 別)
	瀬 尾 敦 子 (長 沼)
後志地区	高 橋 亜 紀 (滝川工業)
	遠 藤 由希子 (小樽水産)
日胆地区	渋 井 美和子 (倶 知 安)
	石 原 玲 子 (登別青嶺)
道南地区	藤 枝 沙 香 (上 磯)
	加賀美 砂百合 (七 飯)
上川地区	進 藤 祐 香 (上 川)
留萌地区	岡 田 実希子 (天 塩)
宗谷地区	武 石 彩 (稚 内)
オホーツク地区	百 井 ひらり (北見工業)
十勝地区	平 澤 朋 子 (鹿 追)
釧根地区	薬師寺 諄 (根 室)

3 事務局校 (市立函館高等学校)

事務局長 (教 頭)	渡 部 慶 一
事務局員 (事務長)	相 馬 直 仁
事務局員 (教 諭)	橋 本 晃 子

オリエンテーション

(第74回北海道高等学校家庭科教育研究協議会)

北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長
市立函館高等学校 校長 佐 紺 撰 子

1 はじめに

ご多用の中、昨年度を上回る90名を超える皆様に全道各地よりお集まりいただき、誠にありがとうございます。

このオリエンテーションは、本研究協議会の目的や内容等について、より理解を深めていただきたく、貴重なお時間を頂戴しお話しするものです。



2 本研究協議会のあゆみ

本研究協議会は、昭和27年(1952年)に岩見沢西高等学校で第1回目を開催し、本大会で74回目を迎えます。

当初、当番校制で実施しておりましたが、平成24年度より全道からお集まりいただいた運営研究員による運営となっております。

3 令和6年度第73回北海道高等学校家庭科教育研究協議会報告

昨年度は8月1日・2日に開催いたしました。校長先生、家庭科の先生を合わせて90名近い皆様にお集まりいただき、感謝申し上げます。参加者の皆様のアンケートからは、概ね満足していただけたのではないかと思います。

4 本研究協議会の目的

本研究協議会の目的は、「家庭科教育に関する諸問題を研究し、会員の資質向上と北海道高等学校家庭科教育の振興を図る。」ことです。

5 本研究協議会の今年度内容

昨年度のアンケート結果などを参考に、本日の全体会Ⅰでは、今年度新たに講話を入れました。札幌市男女共同参画センター係長の菅原様から「未来の生活者を育てるジェンダーの視点とは」と題して、ワークショップ込みの講話をしていただきます。

その後の研究発表では、千歳高校 飯田先生から、外部コンテストを活用したフードデザインの授業について、初任者である根室高校 薬師寺先生から、地域と連携した幼稚園、認定こども園での実習を通じた「家庭総合」の授業についての提言がございます。

午後からの分科会では、お二人の先生も参加されますので、ぜひ協議を深めていただきたいと思います。

また、毎年好評のグループ別体験研修講座ですが、今年度は、食生活と、新たに介護福祉、住生活、ICTの分野で実施いたします。

食生活のチーフは、倶知安高校 渋井先生、介護福祉のチーフは、上川高校 進藤先生、住生活のチーフは、小樽水産高校 遠藤先生、ICTのチーフは、滝川工業高校 高橋先生が担当していただきます。

先生方の明日からの授業実践につなげていただけることを願っております。どうぞご期待ください。

6 家庭科の状況について

2点お話しします。

1つ目は、次期学習指導要領の基本事項を審議する中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の教育課程企画特別部会が、本年5月22日に第8回会合を開き、中学校の技術・家庭科の技術分野を教科として独立させることを提案した、ということです。

なお、家庭科の観点だけではなく、全体を通して見る必要があると思いますので、ぜひ文部科学省のホームページ等をご覧ください。

※令和7年9月25日、中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」より

第四章 情報活用能力の抜本的向上と質の高い探究的な学びの実現

(1)情報活用能力の抜本的向上

●具体的な方向性と論点

①小中高を通じた体系的・抜本的な教育内容の充実

【中学校段階】

～現在の技術・家庭科については、教員免許、担当教員は別であるが、成績評価の際は1つの教科として記載していること等に伴うデメリットも大きいため、家庭科と情報・技術科(仮称)の二つの教科に分離すべき

2つ目は、北海道高等学校遠隔授業配信センターにおいて、今年度から「家庭基礎」の配信が始まりました。北海道高等学校遠隔授業配信センターは、愛称 T-base で、北海道教育委員会が、「小規模校や離島にある高等学校においても、大学進学から就職までの多様な進路希望や習熟度別学習に対応した教科・科目の開設が可能となるよう、遠隔授業の配信機能を集中化するため」令和3年4月に開設したものです。有朋高校に置かれています。

家庭科については、今年度は、松前、虻田、上ノ国の3校に配信する計画となっているようです。実習のある家庭科の遠隔授業を今年で実施する配信センターは全国的にも少ないとのこと、文部科学省も関心が高いと伺っています。

最後に、事務局は、ご参加の家庭科の先生方にとって、本研究協議会がより有意義なものとなるように、アンケートのご回答なども参考としながら、運営研究員の先生方・教頭先生方、家庭部会役員の校長先生方などにご相談しながら、悩みに悩んで内容を検討しています。

事務局とは、今年度の市立函館高校だけではなく、昨年度までの森高校も含まれています。

満足いただけないところもあるかもしれませんが、改善すべき点につきましては、是非アンケートに建設的なご意見をお願いします。全て実現できるかどうかはわかりませんが、検討してまいりたいと思います。

また、是非、「家庭科の未来について」「本研究協議会の運営について」アイデアをいただける、一緒に考えてくださるという先生がいらっしゃいましたら、市立函館高校 佐紺までご連絡ください。

なお、次年度の本研究協議会は、令和8年7月29日(水)・30日(木)に、ここ、かでの2・7で実施予定です。ご予約に入れておいていただければ幸いです。

全道200を超える高等学校がございしますが、複数の家庭科教員が配置されている学校が減少し、教科指導の相談がしにくい状況にあるのではないかと思います。ぜひ、本研究協議会をはじめとする集合型研修の機会を活用しスキルアップにつなげていただきたいと思います。

それでは、この2日間で先生方ご自身の授業実践の振り返りとなり、次につながる活力になることを期待申し上げ、オリエンテーションといたします。

提言1 食を通じた表現力の育成を目指して

～「ばん馬」を題材としたキャラ弁制作の実践～

北海道千歳高等学校 教諭 飯田 怜 奈

1 はじめに

本校の生徒は素直で温厚な気質であり、学校生活に真面目に取り組んでいる。一方で、他者との比較経験から自信を持ってない生徒も少なくなく、授業においては成功体験を積み重ねることが重要であると考えてきた。

2 実践の目的

現代の生徒は日常的に食に触れている一方で、「食べること」や「作ること」の意味を深く考える機会は必ずしも多くない。また、地域文化への関心が薄れがちな現状も課題として捉えられた。

そこで本実践では、北海道の文化資産である「ばん馬」を題材としたキャラ弁制作に取り組みせることで、地域とのつながりを意識しながら、食を通じた表現活動を行うことを目的とした。外部コンテストへの応募を活動のゴールとすることで、「誰かに見てもらう」ことを意識した主体的な学びを促し、生徒の発想力や工夫を引き出すことをねらいとした。

3 実践の内容

本単元では、「テーマ設定と調理実習」を単元名とし、全5時間で構成した。

実習では、限られた弁当箱の中でテーマを表現するために、食材の選択や切り方、配置に工夫を重ねながら制作を行い、思い通りにいかない場面ではデザインの修正や工程の見直しを行うなど、試行錯誤する姿が見られた。最後に、作品発表と自己評価・他者評価を行い、制作過程や工夫点を振り返る活動を行った。

4 学習評価について

本実践では、構想から振り返りまでの過程を重視し、設計シート、実習の様子、作品、発表

内容、振り返りシート等を用いて評価を行った。

特に、地域文化である「ばん馬」をどのように食で表現しようとしたかという発想や工夫の過程を重視し、技術の巧拙だけで評価が左右されないよう配慮した。また、ルーブリックを用いることで、生徒自身が自分の到達度や課題を把握しやすくなり、学習の振り返りが深まった。

5 成果と課題

本実践の成果として、外部コンテストにおいて複数の生徒が入賞を果たし、自分の表現が第三者に評価される経験を通して、生徒の自己肯定感の向上につながったことが挙げられる。また、正解のない課題に取り組むことで、生徒が自由な発想で主体的に表現活動に取り組む姿が見られた。設計シートや振り返りを通して思考過程を可視化できたことも、学びの深化に寄与した。

一方で、表現の意図が見ただけでは十分に伝わらない作品もあり、発表や記述による補完の重要性が課題として残った。また、学校内での評価と外部評価との違いに戸惑う生徒も見られ、評価の多様性について丁寧に扱う必要性も明らかになった。

6 おわりに

本実践を通して、キャラ弁制作という身近な活動が、生徒にとって思考力・判断力・表現力を総合的に発揮する学びの場となることを実感した。食という生活に根ざした題材に地域文化を掛け合わせることで、学びにリアリティが生まれ、生徒の主体的な取組を引き出すことができたと考える。

今後も、生徒の学びを深める家庭科実践の充実を図っていきたい。

提言2 家庭・地域と連携した授業の指導と評価の工夫と改善

地域と連携した「家庭総合」の授業～認定こども園での実習を通して～

北海道根室高等学校 教諭 薬師寺 諄

1 はじめに

阿寒本町地区と根室市は子どもの人数が人口に対して少ない。そうした実態も踏まえて阿寒高校では認定こども園阿寒幼稚園、阿寒小学校、阿寒中学校との4校連携の一環として、平成13年から幼稚園交流を行っている。

根室高校では「保育基礎」において、幼稚園に協力していただき、実際に園児との交流を図り、保育について考えることができる実践を行っている。本研究では主に阿寒高校での幼稚園交流についての実践を報告する。

2 実践の目的

少子化・核家族化が進み、親戚付き合いや近所付き合いなど、人の関わりが希薄になった現代において、乳幼児との関わりを持たないまま大人になり親として子育てを行う中で初めて困り感を持つケースも多いと聞く。そのため、実践的・体験的な学習活動を通して幼稚園児との触れ合いを深め、保育についての基礎的・基本的な知識や遊びの重要性を理解できることを目的とする。

3 実践の内容

- ① オリエンテーション（2時間）
- ② 保育計画作成（6時間）
- ③ 中間発表・保育内容検討会（2時間）
- ④ 計画仕上げ（4時間）
- ⑤ 実践リハーサル（2時間）
- ⑥ 幼稚園交流学習（4時間）
- ⑦ 実践のまとめ（5時間）
- ⑧ 成果発表（2時間）
- ⑨ 振り返り（1時間）

4 評価方法と改善

評価の方法はシラバスによる幼稚園交流に関

わる観点での評価とルーブリック評価で行った。評価を行うにあたって、生徒には毎時間ワークシートにどのような気づきがあったのか記入してもらっていたが、ルーブリック評価が生徒に伝わりにくいことが実際に行った先生方から挙げられた。

実践までの過程を評価する内容が「学びに向かう力・人間性」でしか示されておらず、実践のみの評価であり、実践までの過程を評価する内容が「学びに向かう力・人間性」でしか示されておらず、実践のみの評価となっていた。後期から家庭科ではルーブリックの文言を参考に過程も評価できるよう取り入れた。

5 成果と課題

阿寒高校での取組を振り返って、実践で生徒を評価するとしたことで生徒の取組の過程をうまく評価できていないことが考えられた。

今後、根室高校でも教科横断的な取組や幼稚園や保育所などの託児施設と連携し、実習やボランティア活動を行っていきたい。

6 終わりに

今回、このような機会をいただき、改めて幼稚園交流が生徒にどのような影響を与えているか考えることができた。幼稚園交流という阿寒高校の取組があったおかげで、子どもが苦手でも一生懸命取り組んだり、子どもと向き合おうと会話を試みたりするなど、生徒の様々な姿を見ることができた。地域と協働して学習を行っていくことで、生徒の考えも実体験に基づいたものとなり、思考が深まっていく。

今後、根室高校でも、実践的・体験的な学習を行い、指導と評価が一体となった授業が実現できるように取り組んでいきたい。

分科会報告

第1分科会

北海道稚内高等学校 教諭 武石 彩

1 提言者

千歳高等学校 飯田 怜奈 先生

2 研究発表

外部コンテストを活用したフードデザインの授業～思考力・判断力・表現力の育成を目指して～

3 研究発表の概要

現代の生徒たちは、食べることや作ることの意味を深く考える機会は少ない。また、地域文化への関心が薄れがちな状況もあるため、「キャラ弁」という親しみやすい題材を用いて北海道の文化遺産である「ばん馬」をテーマとした表現活動に取り組みさせた。本実践を通じて、生徒たちは活動に意欲的に参加していた。今後においても、こうした外部コンテストの機会を効果的に活用しながら、生徒の思考力・判断力・表現力を多面的に育成できるような学習環境の整備に努めていきたい。

4 研究発表に対する質疑応答

【質問】

(1) 実習費は年間一人当たりいくら徴収しているか。

(2) 必要な材料をどのように集約しているか。

【回答】

(1) 年間一人当たり5,000円徴収している。

(2) 生徒に何が必要かまとめさせて把握している。

5 研究協議

(1) 「思考力、判断力、表現力の評価の工夫」

(2) 「外部コンテストと出前授業の活用状況」

6 研究協議のまとめ

(1) 小規模校では、生徒ひとり一人を丁寧に見ることができる。大人数では評価に時間がかかる。そのためICT活用が考えられる。その一方で、プリントなどで成果物に対してコメントを記入することで、生徒とのコミュニケーションが生まれる良い面もあるため、両方を活用した方が効果的と考えられる。

ルーブリック評価を事前に作成することで評価しやすくなる。それ以外に生徒に投げかける発問の工夫が必要である。活動していたグループごとに振り返りをさせることで、その活動自体で評価の材料として活用する方法もある。

(2) 実践例として地域の方からの講話、お弁当コンテスト、制服コンテスト等の参加、読み聞かせの体験など、様々な活動があがった。実施する上での懸念事項として、きっかけがないと挑戦しにくい面や、謝礼の問題、時間割調整の問題などがあり、結果として挑戦しにくいという意見があった。コンテストへの参加を通して生徒自身の自己肯定感が高まる面もあるため、活用してみない手はないと考える。

7 第1分科会担当者

広尾高等学校 相馬 良美

帯広南商業高等学校 松原 明香

札幌厚別高等学校 小田 美穂

稚内高等学校 武石 彩

分科会報告

第2分科会

北海道北見工業高等学校 教諭 百井 ひらり



提言者

北海道根室高等学校 教諭 薬師寺 諄

1 提言に関する質疑応答

【質問①】班構成を行う際、どのような意図で分けたのか。【回答①】提言者が赴任する以前に、他の教員によって班編成が行われていた。生徒同士の間関係や互いに協力し合える関係性であるかという視点を重視して構成されていた。

【質問②】どの教科の授業時数として扱っていたか。【回答②】幼稚園教育として位置付けており、体育・音楽・家庭科すべてを授業時数としてカウントし、全教員が関わる体制で実施した。

2 研究協議

- (1) 「家庭科における効果的な実習等について」
- (2) 「実習等における思考・判断・表現の評価について」

3 研究協議のまとめ

- (1) 「家庭科における効果的な実習等について」

都市部に立地する学校では、30人以上の生徒を連れて校外施設で実習を行うことが難しいという現状が挙げられた。そのため自校で高齢者体験や簡易的な体験活動を工夫して行っているという実践が紹介された。実習を行う際には、事前・事後指導を丁寧に行うことが重要であり、他教科との連携の必要性についても意見が出された。校外実習が難しい場合でも、絵本作り、離乳食作り、読み聞かせ、命名体験など、学校内で可能な活動を無理のない範囲で継続していくことが大切であるという共通認識が得られた。
- (2) 「実習等における思考・判断・表現の評価について」

評価基準を事前に生徒へ明確に示すことが重要であり、実習中には記録を残す工夫が必要で

あるという意見があった。生徒に各自目標を設定させ、自己評価につなげる方法も有効であるとされた。実習後には振り返りの時間を確保し、学習の方向性を示しながら整理させることが重要である。ICTを活用し、スライドによる発表や、毎時間の入力に対して教員がコメントを返す取り組み、単元テストをGoogleフォームで実施する実践も紹介された。評価を段階的に行うことで、教員の負担軽減にもつながるとのまとめがなされた。

4 助言

○北海道八雲高等学校教頭 上村 晴美

学校の目指す生徒像や単元配列票が整備されているため、それらに基づき、実習の機会を大切にしてほしいとの助言があった。学習指導要領においても、子育て支援やホームプロジェクト等でのICT活用が示されており、学習評価については毎時間行う必要はなく、内容や時間のまとまりごとに場面を精選して行うことが望ましいとされた。実習のまとめや成果発表の場面で評価することも有効であるとし、今後も授業力向上に向けて精進してほしいとの激励があった。

○北海道室蘭清水丘高等学校教頭 石川 博史

学校教育目標の達成に向け、教科横断的な視点が重要であるとの助言があった。保育実習は必須ではないものの、家庭科でしかできない学習内容であり、生徒が実感を伴って学ぶ貴重な機会であるため、可能な範囲で実施してほしい。子育て支援センターや保健所などの外部機関と連携し、外部人材を活用する事例も紹介された。異年齢との関わりについては、事前・事後学習での気づきを評価につなげることが重要であり、積極的に取り入れてほしいとの助言があった。

第74回北海道高等学校家庭科教育研究協議会 講評

北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班
指導主事 荒 嘉 律

1 はじめに

今年度の本研究協議会での北海道千歳高等学校の飯田怜奈先生、北海道根室高等学校の薬師寺諄先生による提言は、いずれも学習指導要領の趣旨に基づいた「主体的・対話的で深い学び」の実現や「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指したものであり、多くの先生方の参考になる授業実践でした。

2 提言について

(1) 千歳高校飯田怜奈先生の提言について

本実践は、専門教科「家庭」のフードデザインの授業において、外部のお弁当コンテストを学習活動に取り入れ、生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指した取組でした。テーマに合わせて、生徒が食材選択や調理法、盛り付け方法などを自ら考え、試行錯誤しながら学びを深めていました。お弁当箱という限られた空間でテーマを表現する過程において、生徒が主体的にアイデアを出し、お弁当を表現しようとする姿が見られ、思考力・判断力・表現力の育成が図られていました。

献立作成から実習、自己評価・他者評価までの学習の流れが確立され、特に発表活動を通して自らの学習を振り返り、他者の意見が得られる場面を設けたことで、生徒は多面的な視点を得ることができていました。

また、評価にはルーブリックを活用し、学習成果を可視化したことで、生徒は自身の到達段階を把握し、次に向けた学習の調整が可能となりました。一方で、学習評価とコンテスト審査結果との間に乖離が見られたため、学習評価と外部評価の目的の違いを事前に生徒と共有し、

多面的な視点で比較することで、より深く学習内容について考えることができます。

本実践は、外部コンテストの活用を通して、生徒の主体的な探究と創造的表現を実現した優れた取組であり、今後の探究的学習のモデルの一つとして活用できます。

(2) 根室高校薬師寺享先生の提言について

本実践は、共通教科「家庭総合」の保育分野において、認定こども園と連携し、実践的・体験的な学びを通して、生徒の主体性と協働性を育む取組でした。オリエンテーションから保育計画の作成、中間発表、リハーサル、実践、成果発表、振り返りまで、体系的な学習構成が整えられた参考になる実践です。

特に、中間発表の場面で、認定こども園の副園長先生からの助言により、生徒が保育計画を再構成する課程で、学びを深めることができていました。また、ICTを活用して参考事例を調べたり、グループで議論を重ねたりすることで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を往還させていました。さらに、ワークシート記入による振り返りを通して、生徒の「粘り強い取組」や「学習を調整しようとする態度」を具体的に見取ることで、評価を通じて生徒の成長を促すことができています。

保育計画を立てる前に、対象となる園児の様子を観察する活動を取り入れることで、生徒の幼児に対する理解が深まり、より具体的な保育計画を作成することが可能です。

本実践は、地域と学校が連携して、生徒の学びを社会につなげる好事例であり、地域資源を生かした授業の参考例となる実践です。

グループ別体験研修報告

A 食生活セミナー

北海道鹿追高等学校 教諭 平澤 朋子

1 内容

体験実習「道産食材、地産地消の調理実習」

2 参加人数 17名

3 講師

宮島学園北海道調理師専門学校

北海道製菓専門学校

学校長 田村 中様

4 会場

学校法人宮島学園 北海道調理師専門学校

5 研修内容・成果

北海道には大地に育まれた新鮮でおいしい食材がたくさんある。今回は旬の道産食材を用いた料理・調理技術を講師から教えていただいた。

(1) とうもろこしの冷製スープ

作付け面積・収穫量ともに日本一である芽室町から取り寄せいただいた無農薬とうもろこしを使用した。とうもろこしの1本の茎に複数の実がなった場合、選別し最も品質の良い一番果のみ育てて収穫していると教わった。とうもろこしの実をそいで残った芯も捨てずにコトコト煮て旨味、甘味、香りを引き出し、スープに利用した。出来上がったスープは、程良い塩味が甘みをさらに引き出し、デザートではないかと思うくらいのととても甘く美味しいスープであった。

(2) 帆立貝のムニエール バルサミコ風味

サバイヨン焼き（噴火湾産帆立使用）

サバイヨンとは、卵黄にワイン、シャンパン等のワイン類を加えて湯煎で加熱しながら泡立てとろみをつけたソースで、ふわふわでこくのあるソースに仕上がった。今回は料理に使用したが、甘く味付けをし、ラム酒やコアントローなどを入れて仕上げるとデザート用になる。例



えばバナナやいちごなど柔らかい食感のフルーツにかけたり、リンゴや梨など歯ごたえのある食感のフルーツは煮てからサバイヨンソースをかけて焦げ色をつけると良いとアドバイスいただいた。

(3) 道産果実の皿盛りデザート

- ・さくらんぼパルフェのプラムソース添え
- ・ミントのソルベ

時間の関係上、専門学校の先生や学生の方々につくっていただいたものを試食した。講義ではミントの栽培や利用法、料理の盛り付け方について学んだ。

セミナー中は終始田村先生の手際の良さ、食品を扱う丁寧な手さばきに圧倒された。料理をつくる時には、レシピを参考にはするが、同じ食材でも収穫時期や産地によって味や香り等も違うため、「べろメータ」（味見）と「勘ピュータ」（この位）を働かせて調理をすると上達が早いとおっしゃっていた。実習終了後は、料理の代替食品について質問が出るなど活発な雰囲気での体験学習となった。

【講座担当者】

倶知安高等学校 渋井 美和子

芦別高等学校 吉村 佳名子

長沼高等学校 瀬尾 敦子

当別高等学校 山田 真代

鹿追高等学校 平澤 朋子



グループ別体験研修報告

B 介護福祉セミナー

北海道稚内高等学校 教諭 武石 彩

1 内容

(1) 講話

「福祉用具とは～福祉用具の意義と種類、
選ぶ視点」

(2) 体験

福祉用具・介護ロボット体験

2 参加人数

9名

3 講師

専門学校北海道福祉・保育学校

介護福祉学科学長 阿部 幸恵 様

介護福祉学科主任 高橋 綾 様

4 会場

専門学校北海道福祉・保育学校

5 研修内容・成果

講話は、福祉用具とは何かから始まり、福祉用具の給付の変遷、福祉用具を使用する意義、福祉用具を選ぶ視点等について具体的な例示を用いて説明をしていただきました。

次に、体験活動では、様々な福祉用具・介護ロボットを実際に動かすなどの体験させていただいた。また、使用方法ポイントや注意点、利用者側の視点に立った場合の効果について説明を受けました。実際に体験することで、知識だけでなく、使用感という側面からも得られるものがあり、深い学びに繋がりました。

アザラシ型ロボット



リハビリ・レクリエーション機器



電動車いす



【講座担当者】

江別高等学校教頭	山本	昌枝
上川高等学校	進藤	祐香
七飯高等学校	加賀美	砂百合
石狩翔陽高等学校	北村	仁美
稚内高等学校	武石	彩

グループ別体験研修報告

C 住生活セミナー

北海道札幌啓成高等学校 教諭 米根 順子

1 テーマ

いのちを守る避難計画

～防災に関する情報の活用と備え～

2 講師

藤女子大学ウェルビーイング学部地域創生学科教授 田中宏美

3 高等学校家庭科教育における防災教育で抑えるべき課題

・高等学校家庭基礎教科書での防災に関する内容の取り扱い方について、1993年から2016年までの変遷をたどった。時代とともに防災についての記載量は格段に多くなっており、内容も多岐にわたる。最近の傾向としては、これまでの住まいの安全に関わる基本的内容に加え、災害への備え、避難所での助け合いや地域・人とのつながり・助け合いなどに重点が置かれていることが分かる。

・大学生を対象としたアンケートによると、防災教育を学習した教科として記憶に残るものは、「総合的な学習の時間」について「家庭科」が第2位である。学校で習う機会以外で自主的に防災に関して学ぼうと考える人は少ないという結果から考えても、家庭科で取り上げることは非常に意義深い。今後さらなる防災教育の内容の充実と精査が重要になると言える。

4 各防災に関する情報の活用と備え

防災教育に活用が期待できる題材として以下のものを紹介していただき、実際に体験しながら講義を受けた。

○「キキクル（危険度分布）」（気象庁）

地震・大雨・津波・洪水などについて、検索時点での状況や危険度が視覚的に確認することができる。

○「重ねるハザードマップ」（国土交通省）

住所や地図からその場所の災害リスク（洪水・内水、土砂災害、高潮、津波）を調べることができる。

○「浸水体験AR」（木曽川上流河川事務所防災情報課）

今いる場所が浸水したらどうなるのか、現実世界にARを合成し、体験することができる。

○「さっぼろ防災ハンドブック」（札幌市危機管理局危険管理部）

家庭での備えや災害の知識など、災害時に自らの命を守るために役立つ内容を記載している。

○「逃げキッド～マイタイムラインをつくってみよう！～」（国土交通省）

河川の氾濫が起きそうな時に、余裕をもって安全に逃げるための行動を考える。江別市、苫小牧市、東京都のマイタイムラインなどが活用しやすい。



グループ別体験研修講座報告

D ICT セミナー

北海道北見工業高等学校 教諭 百井 ひらり

1 主な内容

「誰でも使えるAIがやってきた
～仕事や生活に活用するこつ」

2 参加人数 23名

3 講師

北海道情報大学 経営情報学部
先端経営学科 教授 藤木 直樹 様

4 会場 かでる2・7 5階 510研修室

5 研修内容・成果

はじめに、人工知能(AI)に関する基礎的な概念や、ITとICTの違い、現代社会が「Society 5.0」と呼ばれる情報化社会へ移行していることについての説明をいただいた。AIが私たちの生活にどのように浸透しているかを、具体的な事例を交えながら整理することで、家庭科教育におけるICT活用の必要性を再確認する機会となった。

続いて、AIスピーカーやナレーション AI、Notebook LM など、実際に利用できるツールの

特徴や使用例についてご紹介いただいた。音声認識・自然



言語処理の仕組み、家電との連携、ニュース提供や翻訳機能など、生活場面での応用可能性が多岐にわたることが理解できた。また、授業づくりに活かせる具体的なサービスも多数提示され、実践につながる知見を得ることができた。

後半は、生成AI(ChatGPT など)の特徴と課題についての説明が中心であった。生成AIは文章・画像・音声を新たに作り出せる一方、誤情報(ハルシネーション)や著作権、フェイクニュースへの注意が必要であることをご指摘いただいた。また、プロンプト(指示)の工夫によって回答の精度が大きく変化すること、役割付与や条件指定を用いることで教育現場での活用がより効果的になることを学ぶことができた。さらに、生成AIの進化としてファクトチェック機能やエージェント型AIの紹介があり、今後はPDFの読み込みやWeb検索と連動して調査・分析を行う高度なAIが教育現場に導入される可能性が示された。

今回の研修を通して、AI技術を授業・校務・生活にどう取り入れるかを多面的に考えることができた。特に、家庭科における教材作成や情報整理の効率化、学習支援ツールとしての活用など、多くの可能性を実感する大変有意義な研修となった。

【講座担当者】

大樹高等学校	田中 裕子
上富良野高等学校	千葉 和代
滝川工業高等学校	高橋 亜紀
上磯高等学校	藤枝 紗香
天塩高等学校	岡田実希子
北見工業高等学校	百井ひらり

北海道高等学校長協会家庭部会 調査研究委員会報告

研究主題「北海道の家庭科教員の抱える現状と課題」

副 題 家庭科授業におけるICTの効果的活用

委員長 能 登 啓 児 (札幌丘珠 校長)

協力委員 石 川 博 史 (室蘭清水丘 教頭) 千 葉 和 代 (上富良野 教頭)

上 野 博 美 (栗山 教諭) 黒 田 さとみ (厚真 教諭)

福 間 あゆみ (鵲川 教諭) 坂 本 壘 (南茅部 教諭)

1 はじめに

GIGAスクール構想による各校での整備が完了したことから、高等学校家庭科においてもICTを活用した学習活動が展開されている。これまでの端末活用を促進するという視点から、今後は端末活用により「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」を実現する視点へと軸足を移していくことが求められている。家庭科の学びを深め、学びの本質に迫る授業においては、1人1台端末や汎用的なクラウド、生成AI等を効果的に活用し、生徒の資質・能力の育成を図っていく必要がある。

更には、生徒の興味・関心を深める学習課題の工夫の一つに、ICTの効果的な活用が挙げられ、一連の学習過程の中で効果的にICTを活用することが求められている。

他にも、家庭や地域の生活課題を見だし、その解決策を検討するなどの学習活動において、検討した解決策の改善点等を生成AIに求めたり、生成AIを活用して議論で出た意見をまとめたりすることで、論点が分かりやすくなるなどの利点がある。

しかし、高等学校家庭科の授業におけるICTの活用は、一斉学習での「教員から生徒への実技示範や教材提示」、協働学習での「学習成果の発表での活用」にとどまりがちで、授業実践事例を示した資料も十分とは言えない状況である。

そこで、本調査研究委員会では今年度、「家庭科授業におけるICTの効果的活用」と題してICT

の効果的な活用に関する実践事例研究に取り組むこととした。昨年度、本委員会でも実施した、道内の高等学校におけるICTを活用した家庭科の授業環境の整備状況、実際の活用状況、及び活用上の課題を把握することを目的としたアンケート調査の結果を踏まえ、ICTを活用した実践事例の必要性を実感し、道内で取り組まれた実践事例を収集し、道内の高等学校家庭科教員が自由に閲覧可能なウェブサイトを開設することとした。

実践事例の収集に当たっては、高等学校家庭科教員が参加する研究会等において、参加者に協力の呼びかけを行い、キーワードは「簡単に誰でも使える実践」とし、多忙な高等学校の家庭科教員が授業の準備等に時間をかけずに「簡単に使える、使ってみたいと思える」ICTを活用した実践を提供していただいた。

また近年、生成AIをはじめとしたAI技術は、かつてないスピードで社会に普及し、生成AIを使いこなすための力を高等学校家庭科においても意識的に育てていくという姿勢が重要であるとともに、生成AIがさらに社会生活に組み込まれていくことを念頭に置き、生成AIを活用した実践事例も紹介し、加えて札幌北高等学校の松本奈巳教諭より、教科指導に関する自主的な研修として行った生成AI活用に関する学校視察の報告も情報提供いただいた。

2 実践事例の概要

提供いただいた実践事例は、江別高等学校ウ

ウェブページ内の北海道高等学校長協会調査研究委員会のページに「ICT活用実践事例集」として、道内の家庭科教員が気軽に閲覧・活用できるよう掲載している。今後も実践取組を収集し、充実した実践事例集としていきたい。

ここには提供いただいた実践事例の概要のみを一覧で示す。

学校名	授業者 (敬称略)	ICT教材・アプリケーション等	科目名	実践タイトル・テーマ等	場面分類
1	鶴川 福間 あゆみ	タブレット・Canva	フードデザイン	トマトのCMをつくろう	協働
	鶴川 福間 あゆみ	GoogleClassroom・実教出版デジタルコンテンツ	家庭基礎	クレジットカードで買い物をする	個別
3	鶴川 福間 あゆみ	ワークシート・タブレット・Google MyMaps	家庭基礎	世界の国の人たちはどんな衣服を着ているのか	個別・協働
	南茅部 坂本 壘	マイホームクラウド (間取り図作成アプリ)	家庭総合	理想の住空間をデザインしよう	個別・協働
5	南茅部 坂本 壘	Googleフォーム・TfabTile (画面共有アプリ)	家庭総合	Googleフォームを活用した単元テスト	個別・協働
	厚真 黒田 さとみ	Googleスライド・ふきだしくん	家庭総合	家族の献立を考えよう	個別・協働
7	栗山 他 上野 博美 他	エクセルシート・ジャムボード・Googleフォーム・スプレッドシート・スライド	家庭総合・家庭基礎	生活における経済の計画～マネープランゲームの活用	協働
	穂別 石井 京子	タブレット・モニター・GoogleClassroom・ワークシート	家庭総合・フードデザイン	調理実習の事前学習	一斉
9	穂別 石井 京子	タブレット・モニター・Googleフォーム・GoogleClassroom・ワークシート	家庭総合・フードデザイン	野生動物との共生	一斉・個別
	苫小牧工業 米川 美雪	タブレット等	家庭基礎	様々な場面でのICTの活用	一斉・個別・協働
11	滝川 三谷 有香史	クロームブック・PowerPoint・Googleスライド・GoogleClassroom・プロジェクター	社会福祉基礎	多様な生徒への対応	個別
	千歳 飯田 怜奈	Googleスライド	家庭基礎	今、妊娠したら・・・?	個別
13	室蘭工業 日向 陽子	ワークシート・GoogleClassroom・タブレット・GoogleMeet・プロジェクター	家庭基礎	私が見つけたユニバーサルデザイン	個別
	室蘭栄 林 雅代	食事摂取基準アプリケーションソフト (実教出版)・Googleフォーム・タブレット	家庭基礎	1日の食事のバランスを考えよう	個別
15	札幌手稲 富田 俊江	タブレット・Googleドキュメント・FigJam	家庭基礎	制服のメリット・デメリットから制服の役割を考えよう	個別・協働
	札幌厚別 小田 美穂	ふきだしくん	家庭基礎	ふきだしくんで意見交換	協働
17	根室 薬師寺 諄	モニター・パソコン・GoogleClassroom・Googleドキュメント	家庭基礎	消費生活～金融商品と保険～	個別

18	室蘭東翔 小川 都	タブレット・Googleスライド	フードデザイン	課題提出	個別
	旭川工業 江崎 恵子	タブレット・GoogleClassroom	フードデザイン	給食室の装飾	個別
20	富良野 新屋 夏実	クロームブック・TVモニター・Googleフォーム・Googleスライド 明治食育サイト「食の栄養バランスチェック」	家庭基礎	自分の食生活を振り返り、課題を見出し、見直しをしよう	個別
	滝川西 加藤 安香音	タブレット	家庭基礎	快適な住空間をつくろう	個別・協働
22	岩内 石川 幸孝	ワークシート・タブレット・生成AI (Gemini)	家庭基礎・食文化	レシピ (献立) をつくる	AI
	札幌北 松本 奈巳	Google Gemini・ChatGPT	—	生成AIの家庭科教科指導への活用	AI

3 考察とまとめ

情報提供のあった実践事例は、計 23 本であった。

まず、これを「学校における ICT を活用した学習場面」(文部科学省)に則った「一斉学習」「個別学習」「協働学習」の3分類に「生成 AI」を加えた4分類として考察した。分類は重複したものもある。

学校における ICT を活用した学習場面
各教科等の指導でICTを活用することは、子供たちの学習への興味・関心を高め、分かりやすい授業や「主体的・対話的で深い学び」の実現や、個に応じた指導の充実に資するもの。



分類結果は、次の通りである。

【ICT を活用した学習場面による分類】	
一斉学習	4
個別学習	16
協働学習	9
生成 AI	2

最も多かった「個別学習」は、科目や単元の偏りなく実践事例があり、授業に取り入れやすい学習場面であることが明らかになった。次に多いのが「協働学習」、そして「一斉学習」の順

であった。「生成 AI」について、今回の調査において実践事例は少なかったが、今後、多くの学校で試行錯誤しながら活用が進むことが想定される。また、今回提供いただいた事例は、今後の授業づくりの指標となるものであった。

次に、活用した ICT 機器・教材・コンテンツ等について分析した。まず、「タブレット」が全ての実践事例で用いられており、ICT 活用の基盤として定着していることが確認された。次に、「Google フォーム(8)」「Classroom(10)」「Google Meet(1)」を用いた実践事例が多く、課題配信、提出管理、オンライン連携など、学習の効率化を ICT が支えている実態が明らかになった。さらに「Canva(1)」「PowerPoint(2)」「Google スライド(6)」「FigJam(2)」「ふきだしくん(2)」等、表現・編集ツールの活用からは、発表資料の作成や共同編集の場面で ICT が効果的に機能している様子がうかがえる。加えて、「教科書会社デジタルコンテンツ(3)」「農林水産省食育サイト(1)」「国土交通省ハザードマップ(1)」など、公的機関等の資料を活用し、調べ学習や探究学習の質向上につなげた事例も確認された。全体として、デバイス活用から制作、共有、探究支援まで ICT が幅広い学習活動を多面的に支えていることが明らかとなった。

さらに、授業者による「実践の手応え」からは、今後の ICT 活用に向けた多くの示唆があった。例えば、「生物基礎で世界の気温を Google My Maps でまとめたものと家庭科でまとめたもの（世界の民族衣装）を1つの地図上に重ねて表示ができるため、他教科と連携した授業にも発展できる。（鷗川・福間教諭）」という声からは、ICT 活用が教科横断的な学習の実現を強力に後押しする可能性が示されている。また、「作成した（住空間の）平面図は 3D 表示も可能で、立体的な構造の理解が深まった。（南茅部・坂本教諭）」という手応えは、生活のリアリティを伴った理解を促進し、家庭科ならではの学びを深化させる手段として ICT が有効であることを示している。

文部科学省は、令和6年12月に「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン（Ver. 2.0）」を提示している。今回、生成 AI の実践事例は少なかったが、提供していただいた2つの事例は、今後、高等学校家庭科で生成 AI を授業に取り入れる際の参考となり得るものである。現在、道内は元より全国で実践や研究が進められていることから、本研究委員会としても、より効果的な生成 AI の活用の方向性を探っていく必要がある。その結果、ICT 活用の質がさらに高まり、家庭科教育の充実に寄与することが期待される。

4 謝辞

本調査研究の実施にあたり、ご協力をいただいた各高等学校の校長先生、家庭科担当の先生方に心より感謝申し上げます。提供していただいた貴重な実践事例は、北海道の家庭科教育における ICT 活用の現状と今後の可能性を明らかにすることができた。

本研究の成果が、各学校における家庭科教育の充実と、生成 AI を含むより効果的な ICT 活用の推進につながることを祈念するとともに、今後も引き続き、皆様とともにより良い教育環境の整備に取り組んでまいりたい。

改めて、ご協力いただいたすべての皆様に誌上を借りて心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- ・文部科学省（2014）「学びのイノベーション事業実証研究報告書」第4章
(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/04/11/1346505_04.pdf)

【すべての実践事例はこちら】

- ・北海道高等学校長協会家庭部会委員会
(<https://www.do-kateibukai.hokkaido-c.ed.jp/iinkai>)

※調査研究委員会のフィールドに掲載



情報提供いただいた、生成AIの活用に関する学校視察報告を紹介する。

千代田区立九段中等教育学校 学校視察報告 (生成AI活用)

視察日：2025年12月8日（月）

視察者：札幌北高等学校 教諭 松本 奈巳

1 学校概要

九段中等教育学校は、東京都千代田区に設置された公立の中等教育学校で、中学1年生から高校3年生に相当する6年間の一貫教育を行っている。生徒の発達段階を踏まえ、学力の定着に加えて探究的な学びを重視し、思考力・判断力・表現力等の育成を日常の学習の基盤としている。

文部科学省の指定事業のもと、ICTおよび生成AIの教育的活用にも取り組んでおり、学校専用の生成AIシステム「otomotto」を導入している。教育利用を前提に設計され、安全性や活用目的が明確に整理されている点が特徴である。

2 生成AI活用を支える校内の仕組みと方針

otomottoでは、教科別にプロンプト例が共有され、教員・生徒が参照しながら活用できる体制が整えられている。これにより、活用が個人任せにならず、学校全体として一定の方向性を保って進められている。プロンプトの共有は、生徒が自分の考えや前提を整理し、問いを言語化する力を育てる手がかりともなっている。

また、「アナログとデジタルのバランス」を重視し、まずは自分自身の考えを表現することを前提とした上で生成AIを活用しており、生成AIは思考を支え広げる補助的な役割として位置付けられている。

3 教員・授業における活用の広がり

教員は授業実践の検討や業務効率化の面で生成AIを日常的に活用している。一方、授業内で生徒が使用している教科は、現在のところ国語、

社会（地歴・公民）、理科、英語、情報に限られているが、校内での実践の蓄積を背景に、今後さらに広がっていくことが期待される。

4 家庭科の授業を考える視点

今回の視察で特に印象に残ったのは、授業における生成AI活用が、「使うか・使わないか」ではなく、「どの段階で使うか」という視点で丁寧に設計されている点である。思考や判断の主体はあくまで生徒自身に置かれ、その上で生成AIが取り入れられている。

家庭科では、日常の行動や判断を振り返り、その理由や背景を可視化・言語化しながら学びを深めていく。献立作成では、自分で考えた内容について栄養バランスや生活との関係を生成AIに問い返すことで、良い点や見直せる点に気づくことができる。家計管理のシミュレーションにおいても、自分なりに立てた支出計画をもとに、無理のある点や改善の余地を整理し、考えを深めていくことが可能である。

このような活用から、生成AIは答えを示す存在ではなく、生徒が自分の考えを捉え直し、視点を広げるための思考過程の一部として機能していることが分かる。

また、otomottoに見られる教科別プロンプトの共有は、扱う内容が多岐にわたる家庭科においても有効であり、教科内での共通理解を促し、授業づくりの負担を軽減する仕組みとして大いに参考になる。

5 まとめ

今回の視察で見られた生成AIの活用は、生徒の発達段階や学びの本質を踏まえた実践であった。生成AIを思考の代替ではなく、思考を深め、広げ、見直すためのツールとして捉える姿勢は、家庭科の学びとも高い親和性をもつ。

九段中等教育学校の取組は、今後家庭科で生成AIの活用を検討する際の有効な手がかりとなり、「生活から問いを立て、考えを更新していく」学びをより豊かにする可能性を示している。

Ⅱ 令和7年度北海道高等学校 家庭クラブ連盟活動報告

北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動について

北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長
北海道札幌北高等学校 校長 佐 賀 聡

日ごろから本連盟の活動に対しまして、ご理解とご協力をいただいておりますことに、深く感謝申し上げます。

家庭クラブ活動は、生活を科学的に探究する方法や課題解決能力を高め、活動をとおしてコミュニケーション能力を培い、体験や実践をとおして人間力を育み、これからの未来を担うリーダーとして社会に貢献する、極めて重要な役割を担っています。活動の中心は「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」です。

「ホームプロジェクト」は、学校・家庭のために、一人ひとりが自分の生活を見つめ、家庭生活の充実向上を目指す活動です。

「学校家庭クラブ活動」はグループや学校単位で学校や地域の生活の充実向上をめざす活動です。

その活動の成果を発表する場として、今年度も全国大会と全道大会が開催されました。その結果を報告いたします。

令和7年7月31日、8月1日の2日間にわたり、三重県四日市市文化会館において、「人々をつなぐ夫婦岩 未来の真珠輝いて 希望と笑顔で全国結ぼう」をテーマに第73回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会が開催されました。北海道から九州までの7ブロックの代表が発表し、北海道ブロックの代表として、ホームプロジェクトの部で、江別高校3年 石垣 悠逢さんが「元気もりもりドライバーめし！～父の食生活改善～」をテーマに、学校家庭クラブ活動の部では札幌北高校が「私たちで変える未来の衣生活～well-beingの創造～」をテーマに研究発表を行いました。いずれも素晴らしい発表で、札幌北高校が全国1位にあたる文部科学大臣賞

を、また両校とも、全国高等学校長協会家庭部会賞と全国高等学校家庭クラブ連盟賞を受賞し、審査員からも高い評価をいただきました。

さらに、札幌北高校は、全国大会に参加したクラブ員による投票で、1位となる「クラブ員奨励賞」も受賞し、参加した生徒からも高い評価をいただきました。

令和7年9月25日、26日には、北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会が、当番校である札幌北高校と各加盟校をオンライン（meet）でつなぎ、開催されました。

ホームプロジェクトの部は5校、学校家庭クラブ活動の部では7校の発表があり、ホームプロジェクトの部では「5人と5匹の幸せな暮らし～大切な命を守るための住環境改善～」をテーマとした、江別高校2年 松崎 心春さんが、学校家庭クラブ活動の部では「小さな行動から多様性の実現～1人1人が生きやすい社会に～」をテーマとした札幌北高校がそれぞれ最優秀賞を受賞しました。両校は北海道代表として、令和8年度岐阜県で開催される全国大会で発表を行います。両校には発表内容のさらなる充実を図り、全国大会での活躍を期待しています。

ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動は、生活に根ざした課題を自ら見つけ、計画・実践・振り返りを行う力が育まれます。また、仲間と協力する中で、思いやりや責任感、創造力も養われ、地域や家庭とのつながりを実感できます。これらの経験は、将来社会で生きるための大切な力となると考えます。

結びになりますが、今後とも本連盟の活動へのご支援とご協力をいただきますようお願い申し上げます。報告とさせていただきます。

第 66 回全国高等学校家庭クラブ指導者養成講座に参加して

北海道当別高等学校 教諭 伊藤 恵里香

1 はじめに

令和 7 年 7 月 24・25 日に、国立オリンピック記念青少年総合センターで行われた表記講座に、本校から 3 年浅里結衣と 3 年榎本和楓、次期道連盟会長校顧問の私の 3 名が参加しました。他府県の家庭クラブ活動を直接、生の声で聴くことのできる大変有意義な時間となりました。

2 講座内容

本講座は共通で行われる体験講座と講演以外はクラブ員と顧問教諭とで分かれ、別プログラムで実施されました。

(1) 講義

クラブ員は「ひろげよう！つながろう！学校家庭クラブ活動」と題し、茨城県立龍ヶ崎第二高等学校指導教諭より講義いただきました。後半は地域の問題を解決するための活動についてグループワークショップが行われました。顧問教諭は文部科学省の調査官より「学習指導要領のより良い実践に向けて～ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動ができること～」についてご講義いただきました。

(2) クラブ員・交流会

「都道府県 BINGO！」アイスブレイクゲームを用いて自己紹介と県の紹介が行われました。この交流会で、クラブ員は緊張がほぐれた状態で分科会に臨むことができましたようでした。

(3) 顧問教諭・実践活動報告

千葉県立館山総合高等学校吉野教諭より、学科横断・学年横断で取り組む学校家庭クラブ活動の報告がありました。周囲に積極的に協力を求めることで、生徒への伴走者が増え、生徒の思考や活動がより深まることにつながっているという事例が紹介されました。

(4) 体験講座

こぎん刺し作家の植木友子氏のご指導のもと、日本の伝統的な刺し子技法であるこぎん刺し作品を制作しました。伝統文化を正しく継承しながら、新しいデザインや用途を探究していくことの重要性を再認識することができました。

(5) 講演

KH ジャパン マネージメント社 ヒルトウネン 久美子氏よりご講演いただきました。フィンランドでは、若者のほとんどが大学入学時に家庭から自立するため、高校の家庭科の授業は「自立準備の授業」であり、より実践的な授業内容となっていることがご紹介されました。

(6) 分科会及び報告

共通テーマ「チャレンジしよう 未来へつなげる 学校家庭クラブ活動」のもと、グループ研究協議を行いました。クラブ員は「活動の継続には何が必要か」を、顧問教諭は活動に取り組むために必要な環境・条件・支援について協議しました。ホームプロジェクト学習を総合的な探究の時間に行うなど、各校で工夫した実践例を知り得る貴重な時間となりました。

3 おわりに

このような機会をいただけたことに感謝申し上げます。今回の研修で得た知見を今後の本校の家庭クラブ活動及び道連盟の活動に積極的に還元していきたいと考えます。また、現在北海道では、加盟校の減少が大きな課題となっています。ホームプロジェクト学習・家庭クラブ活動は専門学科だけではなく、全学科の家庭科に位置づけられています。つきましては、ぜひ、多くの学校にご加盟いただき、共に活動を推進していきたいと強く願っております。

第73回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会

北海道代表出場校として（ホームプロジェクトの部）

北海道江別高等学校 教諭 山田 真規子

本校は、令和7年7月31日（木）～8月1日（金）の2日間、三重県四日市市にて開催された第73回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会三重大会に出場し、ホームプロジェクトの部で、生活デザイン科3年石垣悠逢さんが「元気もりもりドライバーめし！～父の食生活改善～」と題して、研究発表を行いました。

長距離トラックドライバーとして働く父の食生活に課題があると考え、1年次の冬期休業中から研究活動を始めました。

父へのインタビュー調査から、勤務時の平均的な食事内容を想定し、食品成分表を用いながら、不足しがちな栄養素を算出しました。

また、フェリーでの移動中には、電子レンジや電気ケトルを使用して簡単な調理ができることがわかり、長距離トラックドライバーのためのレシピ、名付けて「ドライバーめし」の考案に努めました。

研究を重ねる中で、「ドライバーめし」の条件が明確になりました。1つ目には、ドライバーの半数を占める40～50代男性に不足しがちな栄養素を補えること、2つ目には、衛生的で持ち運びがしやすく、長期保存が可能である食材を使用していること、3つ目には、少ない調理器具でもつくりやすく、調理が苦手な人でも簡単に素早く作ることができるという点です。

また、今回、江別市学校給食センターの栄養教諭の先生から、レシピについてのご助言をいただくことができ、保存性が高く、調理しやすい食品の活用や、長距離ドライバーに必要な栄養素についてご指導いただきました。栄養教諭として「おいしく食べてもらいたい」という子ども達への思いに触れ、「働くこと」への考えを

深める機会にもなりました。

さらに、過酷な労働条件下で働く全国のドライバーの方々に「元気を届けたい」という思いから、QRコードで読み取ると、Webサイトでレシピを調べることができるようにしました。

講評では、父の健康を思いやる娘の気持ちに応え、家族で実践を行う様子が伝わるものであったとの評価をいただきました。

大会当日は、全国各ブロック代表の発表を聴くことで、新たな発見と学びが多くありました。

私自身も指導者として、他校の実践内容からたくさん学びがあり、貴重な機会とさせていただきました。祖父母のための作り置きおかずの研究や、手作りお菓子を家計の面から分析した発表、水資源を有効に活用するための実践の様子を動画も活用しながら発表するなど、様々な視点でテーマを設定し、創意工夫しながら家族全員が協力し、研究に取り組みされていました。

ホームプロジェクトの研究活動を通して、課題が解決されることはもちろんですが、家族の絆が深まり、家庭生活がより豊かなものになっていくことを実感しました。

全国大会出場という機会をいただき、また、今回の研究発表に際しまして、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます、報告といたします。



第73回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会

北海道代表出場校として（学校家庭クラブ活動の部）

北海道札幌北高等学校 教諭 松本 奈巳

7月31日、8月1日に三重県四日市市民文化会館で行われた第73回全国高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会に生徒8名と参加してきました。本校は学校家庭クラブ活動の部において、「私たちで変える未来の衣生活～well-beingの創造へ～」という発表題目で、文部科学大臣賞、大会参加生徒が最も良かったと思う発表校に与えられるクラブ員奨励賞も重ねて受賞を受賞することができました。

本研究の出発点は、消費行動には社会を変える力があるという視点を示した先輩の研究です。生徒たちは、自らの生活と持続可能な社会との関係を探りたいと考え、身近な衣生活に着目しました。ファストファッションが当たり前となる中で、衣服の生産背景や環境負荷、労働問題などを調査し、衣生活が社会課題と密接に結びついていることを理解していきました。また、テーマ検討にあたっては大学教授から今日的課題やSDGs、研究手法について助言を受け、その中で「ウェルビーイング」という概念に強い関心を持ちました。議論を重ねる中で、ウェルビーイングな衣生活を「環境に配慮した行動を自ら選択し、その過程に楽しさを見出せること」と定義し、関心の高まりが行動変容につながるという仮説を立てて研究を進めました。

最初の実践として学校祭で啓発活動を行いました。環境配慮を前面に出したエコバッグの販売はほとんど反応が得られませんでした。この結果から、生徒たちは「知識を伝えるだけでは人の行動は変わらない」ことを改めて実感し、次の実践として衣服回収活動に取り組みました。1週間で23kgの衣服を回収できたことで、自分たちの行動が周囲に影響を与える経験ができた

一方で、回収後の受け入れ先が限られていることや、リユース後の行き先が不透明であるという現実直面し、より効果的なアプローチをするために地域資源との連携に目を向け、行動デザインやナッジ理論を活用する団体や地域のリサイクルプラザと協働し、子ども服のリユースイベントに参加・調査を行いました。そこで利用者が限られた時間で衣服を選ぶ実態を知り、「内容」だけでなく「伝え方」や「場のデザイン」の重要性が理解できたことから、ナッジを取り入れたリユースイベントを企画・実施しました。初回の結果を検証した上で改善を重ねた再実践では、来場者数やリユース点数の増加が見られ、環境配慮行動への前向きな意識変化も確認できました。さらに、取組を継続可能なものとするため、回収段階での細分化や市民参加型の仕分けイベント、小学生との協働などを提案、環境保全活動の事例発表会で報告しました。

家庭科の「生活から社会を捉える」という視点を生かし、今後も生徒が自らの選択と行動に自覚を持ち、より良い社会の実現に向けて行動することを期待しています。

最後になりますが、全国大会出場にあたりご協力・励ましくくださった関係機関や皆様に心から感謝申し上げます。



第 74 回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会を終えて

令和 7 年度北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会担当校

北海道札幌北高等学校 教諭 松本 奈巳

令和 7 年 9 月 25 日（木）～26 日（金）の 2 日間、札幌北高校を担当校として、今年度もオンラインで標記大会を開催しました。加盟校 11 校から生徒・顧問等 164 名が参加し、学校家庭クラブ活動の部 7 校、ホームプロジェクトの部 5 校による研究発表のほか、生徒代議員会・総会、指導者養成講座報告等が行われました。生徒たちは研究成果を存分に発揮し、最優秀賞は学校家庭クラブ活動の部で札幌北高校、ホームプロジェクトの部で江別高校の松崎 心春さんが受賞し、来年 7 月に岐阜県で行われる全国大会へ北海道代表として出場します。オンライン開催ならではの課題もありますが、家庭クラブ活動の意義を再確認し、今後の活動につながる貴重な経験となりました。多くの関係者の皆様のご理解とご協力により、大会を無事に終えることができましたことに、心より感謝申し上げます。

【大会概要】

9/26(木)	内容
14:00～	発表リハーサル、顧問打合せ

9/27(金)	内容
8:50～	発表リハーサル
9:55～	開会式、総会（札幌北高校）
10:50～	研究発表（ホームプロジェクト 5 校）
12:20～	指導者養成講座報告（当別高校）、昼休み
13:10～	研究発表（学校家庭クラブ活動の部 7 校）
15:30～	生徒研修（しおりづくり）
16:00～	開会式

【大会結果：学校家庭クラブ活動の部】

賞 校名	発表題目
企画賞 厚真	誰もが楽しめるように！～共に遊び、共に生きる社会を目指して～
アイデア賞 旭川永嶺	家具の町から発信！～私たちがデザインする夢いっぱい住空間～
優秀賞 北見緑陵	特産品の PR を通した 探究的な活動の成果と課題
最優秀賞 札幌北	小さな行動から多様性の実現へ ～1人1人が生きやすい社会に～
努力賞 清里	食品ロス～減らす取り組み～
実践賞 倶知安	Go for it～食事と共に高みを～
普及賞 江別	検定スキルで保育士さんを支援したい！～Dから始まる地域連携～

【大会結果：ホームプロジェクトの部】

賞 校名	発表題目
技能賞 札幌丘珠	母に笑顔を届けたい ～食事を楽しく豊かに～
最優秀賞 江別	5人と5匹の幸せな暮らし～大切な命を守るための住環境改善～
実践賞 浜頓別	家族と一緒に過ごす時間を増やす
優秀賞 当別	家族の晩ご飯にみそ汁を
努力賞 釧路明輝	おりがみで夏まつり！／古着を売ってみたい！ ～母の仕事と家事の負担軽減につなげたい～

Ⅲ 令和7年度北海道家庭科 技術検定委員会活動報告

家庭科技術検定の実施について

北海道高等学校家庭科技術検定委員長
北海道当別高等学校長 保 格 秀 規

日頃から専門委員の先生方のご尽力や各校のご理解とご協力に、心から感謝を申し上げます。

今年度の家庭科技術検定委員養成講座は、6月江別高校で被服、7月三笠高校で食物、8月函館大妻高校で保育と3分野を別日程、各会場で実施いたしました。次年度も先生方の要望等を踏まえて実施いたします。

令和7年度北海道の家庭科技術検定の状況については次のとおり報告いたします。

1 事業報告

(1) 専門委員

役 職	学校名	氏 名
全国・北海道(被服)	函館大妻	笹森 美絵
全国・北海道(食物)	当 別	伊藤恵里香
全国・北海道(保育)	函館大妻	藤野 可那
北海道(被服)	江 別	狩野千賀子
北海道(食物)	三 笠	斎田 雄司
北海道(保育)	石狩翔陽	西澤 千尋

(2) 諸会議

- ① 常任委員研究協議会 R7. 4. 14
- ② 第1回専門委員研究協議会 R7. 4. 14
- ③ 家庭科技術検定評価研究協議会・
検定委員養成講座(被服) R7. 6. 28
- ④ " (食物) R7. 7. 31
- ⑤ " (保育) R7. 8. 7
- ⑥ 第2回専門委員研究協議会 R7. 11. 25

今年度から北海道事務局を通さず、各検定実施校が全国事務局へ直接申込と変更となった。

これにより、これまで受検状況の把握は北海道事務局担当校のみだったのが、各部門の専門委員も申込サイトに接続することで確認できるように改善された。

2 被服製作・食物調理検定受検者数の推移

級	種目	R7	R6	R5	R4	R3
3級 (4級)	被服	132	152	147	132	145
	食物	373	375	429	485	594
2級 (3級)	被服	71	113	112	93	96
	食物	255	240	348	297	373
準1級 (2級)	和裁	47	50	41	32	44
	洋服	40	45	41	34	38
	食物	70	79	125	146	144
1級	和裁	40	37	34	39	45
	洋服	40	34	28	34	35
	食物	39	83	64	99	86
合計		1107	1208	1369	1391	1600

年々総受検者数の減少傾向が見られる。被服の上位級は例年並だが、下位級で減少した。食物の下位級は微増だが、1級で半減した。

3 保育検定受検者数

級	音楽・リズム	造形	言語	家庭看護
3級	126	289	186	148
2級	31	92	59	57
準1級	27	43	37	43
1級	21	26	43	33
小計	205	450	325	281
合計	1261			
R6	1094			

前年度より受験者数が微増であった。

4 検定実施校数の推移

	R7	R6	R5	R4	R3	R2
実施校数	47	47	48	30	30	51

ポストコロナで実施校数は40後半である。

全国高等学校家庭科技術検定 全国専門委員会に参加して（被服）

全国専門委員（被服）

函館大妻高等学校 教諭 笹森美絵

1 はじめに

令和7年度家庭科技術検定全国専門委員会が、5月28日(火)・29日(水)の2日間にわたり、ホテルメトロポリタンエドモントにおいて開催されました。全国から指導主事の先生をはじめ、専門委員の先生方190名の参加がありました。北海道からは当別高校の伊藤恵里香教諭(食物)、函館大妻高校から藤野可那(保育)、笹森(和服)の3名の参加となりました。

2 全体会

1日目は、事務局長より日程の説明があり、分科会に分かれました。2日目は各分科会で報告などがありました。事務局からは家庭科技術検定について、ホームページのリニューアル(8月頃を予定)・次年度の全国専門委員会の日程変更について連絡がありました。その後、「学習指導要領のさらなる充実に向けて～学習指導要領の趣旨を明確にした技術検定の指導～」と題して、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官の田邊暁子様より講話がありました。学習指導要領の全体構造として何ができるようにするか、何を学ぶか・どのように学ぶかが重要であるということ、また、検定の意義とは合格することだけではなく、指導を通して何を身につけさせたいのかが大事なのではとのことでした。最後にWell-Beingに触れ、授業で教えるのではなく教育を通じて向上していくものであり、教員自身がWell-Beingの向上を目指すことにより、児童・生徒も向上していくとのことをお話をいただきました。

3 分科会

被服製作分科会では、令和6年度委員会報告が作問部と研究評価部より報告があり、研究協

議として令和6年度検定及び令和7年度以降の検定について作問部と研究評価部より、被服問題集の訂正についてなどの説明がありました。

作品評価では、評価の統一性を図るためグループに分かれ、1級から3級までの作品を見て話し合いながら採点をしました。2日目の分科会では、1日目の質問や採点について重点的に解説していただき、評価の基準を確認することができました。分科会の終わりに指導主事より、「衣生活の領域の実施実態についての研究結果として、家庭で衣服を製作しなくなっている。家庭基礎・総合でも内容の差が少なく、広く浅くなりがちである。大学でも被服製作が必修から外れた。しかし、家庭科の授業の中で手ごたえのある授業は、被服製作など縫製することである。縫製などから得られる体験がポイントだと思う。実技の指導ができる教員を育てていかなければならない。家庭科技術検定を学んだ生徒から、後継者を輩出しなければならない。」との言葉がありました。

4 おわりに

全国専門委員会へ参加して、検定の受験者が減少傾向にある中で、被服検定3級のみ向上したことは良かったことではありますが、上位級の受験者減少については、時間不足や教員の技術不足で指導できないことに問題があると感じました。技術検定の必要性は十分にわかってはいるものの、できないのが現状のようです。全国専門委員会で学んだことを周知し、家庭科技術検定を広げていくために専門委員の先生方と協力して検定委員養成講座の内容を精査することで、多くの先生方に参加していただけるよう考えていきたいと思いました。

全国高等学校家庭科技術検定

全国専門委員会に参加して（食物調理）

全国専門委員（食物）

北海道当別高等学校 教諭 伊藤 恵里香

1 はじめに

令和7年度の家庭科技術検定全国専門委員会が、5月14日(水)・15日(木)の2日間にわたり、東京都のホテルメトロポリタンエドモンドにおいて開催されました。被服製作、食物調理、保育の分野から全国専門委員それぞれ1名の派遣でした。私は北海道技術検定代表理事校として2回目の参加となりました。

本会は、家庭科技術検定の評価や運営について共通理解を深め、技術検定の円滑かつ適正な実施を図るとともに家庭科教育の充実・振興に資する目的で開催されています。14日(水)は開会式と全体会及び分科会、15日(木)は分科会、全体会が行われ、最後に国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官の田邊暁子様より講話がありました。

2 分科会

食物調理分科会では、令和6年度委員会報告が作問部と研究評価部よりあり、続いて研究協議として令和7年度以降の検定について作問部と研究評価部より説明がありました。

令和7年度検定については、第61回・第62回の検定指導要項及び評価基準について、実施要項に記載の内容の確認が行われました。また、3級の課題であるきゅうりの半月切りおよび計量の評価方法と基準について技術検定DVDを使用して解説が行われました。なお、3級は全国高等学校家庭科教育振興会のWebサイトで動画を見ることができますので、ご活用下さい。合わせて、令和7年度前期(第61回)の指定調理課題である吉野どりの吸い物、涼拌絲(2級)、後期(第62回)さつま汁、果汁かん(2級)、二色ゼリー(1級)のできばえの評価方法およ

び基準についてもDVD教材を使用して共有されました。特に果汁かんについては、出来映え(形・状態)に対して写真資料を提示しながら評価点の参考が示されたので、大変参考になりました。

その他、検定試験を実施する上での質疑については、令和7年4月に発行された食物調理技術検定資料集の中に質疑応答集としてまとめられています。検定実施校においては必ずご購入の上、内容を確認いただき、厳正に検定実施を行っていただきたいと思います。質疑応答集で確認できない質問事項は、理事校もしくは全国専門員より質問をいたします。

分科会では情報交換会として「準1級・1級を取り組みやすくするためにはどのようにしたらよいか」について、グループに分かれて討議を行いました。各都道府県から、専門学科の減少、普通科での実施の難しさ、上位級の指導の難しさなどの課題が挙げられていました。北海道での実施方法の参考になる点もいくつかありましたので、今後の評価講習会の企画に活かしていきたいと思います。

最後に、基礎・基本があつて初めて工夫や応用ができるので、実技指導は、なぜこうするのかを大事にする「考えさせる授業」とし、「自立して生きていくための力」が身に付いているかを確認できる指導として欲しいとご助言をいただきました。

3 おわりに

令和7年度より、検定級が変更になりました。検定試験を導入しやすくなりましたが、残念ながら、食物調理の受検者数は減少傾向にあります。「生きる力」を身に付ける授業として、検定導入をご検討いただければと願っています。

全国高等学校家庭科技術検定 全国専門委員会に参加して（保育）

全国専門委員（保育）

函館大妻高等学校 教諭 藤野 可那

1 はじめに

令和7年度家庭科技術検定全国専門委員会が5月14日（水）・15日（木）の2日間にわたり、東京千代田区ホテルメトロポリタンエドモントにおいて開催されました。北海道からは、専門委員として函館大妻高等学校の笹森美絵教諭（被服）、北海道当別高等学校の伊藤恵里香教諭（食物）、函館大妻高等学校の藤野（保育）が参加しました。

2 全体会

14日（水）は開会式・全体会・分科会、翌15日（木）は分科会・全体会が行われました。1日目の全体会では、元文部科学省初等中等教育局主任視学官の櫻井純子様から技術検定誕生の背景や過程、検定への思いをお話頂きました。2日目の全体会では、文部科学省初等中等教育調査官の田邊暁子様から講評・講話を頂きました。また、事務局から今年度以降の技術検定の変更点の確認と来年度以降の全国専門委員会の在り方についての説明がありました。

3 分科会

(1) 音楽リズム表現技術

各級の今年度の試験曲の指導方法の説明に加えて、先生方と一緒に拍を打ち、歌を歌うなど、実践的な内容が盛り込まれていました。また、昨年度からの変更点や日頃質問の多い内容についての確認も行われました。準1級では動画を用いた評価を行い、歌が描く情景や意味を想像し、子どもと共に楽しみながら歌い演奏することの大切さが強調されました。

(2) 家庭看護技術

各級の内容と狙い、実施方法、準備物、評価の観点、指導方法についての説明が行われ、1級では動画を用いた評価を行いました。乳幼児と接することを想定し、身だしなみを整えることの大切

さや子どもの発達や状況に応じた言葉がけの重要性を確認しました。準1級では、動画を用いて清拭に関する指導方法の例が紹介され、指導方法の工夫により生徒にとってより深い学びとなることが示されました。

(3) 言語表現技術

各級の内容と狙い、評価方法と留意点についての説明に加え、本の開き癖の付け方の実演と動画を用いた1級の評価も行いました。マスクを外すことや子どもの年齢ごとの発達の特徴をよく理解することが大切であると説明されました。また、練習の際は丁寧にはっきりと恥ずかしがらずに大きな声で読んで演じること、複数の幼児が目の前にいることをイメージすることが大切であると伝えられました。

(4) 造形表現技術

普段の生活の中で自然物を観察し、身近な廃材を素材として生かして表現することを生徒に認識させてほしいと伝えられました。その後、2級から1級までの実際の作品を使った評価を行いました。また、今年度の変更点として、準1級のテーマを1週間前に提示すること、失格事項の追加や1級の検定時間が60分になることが伝えられました。

4 指導助言

委員長の鈴木香先生からは保育技術検定は他の検定とは違い、誰か（子ども）のために身に付けるものであり、この意義のある活動に関わる先生方には誇りを持って指導をしてほしいというお言葉を頂きました。

5 おわりに

全国専門委員会に参加し、検定内容の再確認と評価基準のすり合わせを行うことができました。変更点も含め、検定実施校への周知の徹底をしていきたいと思えます。

令和7年度北海道高等学校家庭科技術検定評価研究協議会

検定委員養成講座実施報告

北海道家庭科技術検定事務局

北海道当別高等学校 教諭 伊藤 恵里香

1 はじめに

令和7年度北海道高等学校家庭科技術検定評価研究協議会・検定委員養成講座は、全道高等学校の家庭科教諭延べ35名が参加し、技術検定の指導方法・評価講習を受講いただきました。

今年度も分野ごとに日にちと会場を分け、6月27日(金)に江別高校を会場に被服製作の講座、7月28日(月)に三笠高校を会場に食物の講座、8月5日(火)に今年度初めて函館大妻高校を会場に保育の講座を実施しました。

2 評価研究協議会・検定委員養成講座

(1)被服製作

専門委員である函館大妻高校 笹森美絵教諭、江別高校 狩野千賀子教諭の指導のもと、7名の先生方に対し講習会を実施しました。午前は2級の検定試験の実技課題である「アウターパンツ」、午後は3級検定試験の実技課題である「基礎縫いのポケットティッシュケース」について、製作DVDを視聴した上で実習を行いました。受講者の作品や生徒の作品を使用して評価基準に基づいて評価を行い、評価の目合わせを行いました。

(2)食物調理

専門委員である三笠高校 斎田雄司教諭の指導のもと、15名の先生方に対し講習会を実施しました。実施内容は3級検定試験の実技課題である「きゅうりの半月切り」、2級検定試験の指定調理課題である「さつま汁」「果汁かん」です。いずれの課題も生徒と同じ制限時間内で調理を体験していただき、出来上がった作品を評価基準に基づいて評価し、評価の目合わせを行いました。また、養成講座修了後に1級検定実施校に対し、斎田教諭から指導方法や調理のポイント

トについてのご指導をいただきました。

(3)保育

専門委員である函館大妻高校 藤野可那教諭、石狩翔陽高校 西澤千尋教諭の指導のもと、13名の先生方に対し講習会を実施しました。実施内容は検定試験を4種目(造形表現技術、音楽・リズム表現技術、家庭看護技術、言語表現技術)の試験内容解説・評価研究・実施校の指導方法についてご説明いただきました。また、函館大妻高校の保育実習室・ピアノ室などの校舎内を見学させていただける貴重な機会となりました。

3 参加者アンケートより

アンケートにご回答いただいた方々から、「分かりやすかった」、「とても分かりやすかった」との評価をいただきました。特に、生徒の作品を使用した評価演習は、実際の採点との比較ができ、自分の採点基準の妥当性を知る良い機会となったなどと、おおむね高い評価をいただきました。

4 次年度の実施について

評価研究協議会・検定委員養成講座は、毎年継続して実施しています。公正公平な検定実施及び評価を行っていただくために、検定実施校の担当者は必ずご参加ください。また、令和7年度の検定級変更により、すべての級で調査書や履歴書への記載が可能になりました。取得に向けて生徒の意欲を高め、検定試験を導入しやすくなりました。そのためか、今年度は全体の受検者数が減少する中、保育検定の3級受検者数が増え、新たに検定試験を導入した学校も増えています。今後も多くの先生方に参加していただき、家庭科技術検定の輪を広げていきたいと願っております。

IV 家庭科教育に関する報告

第13回 北海道高等学校長協会家庭部会

意見・体験発表大会を開催して

事務局

北海道江別高等学校 教諭 鈴木 朋 美

1 大会を運営して

今年度で13回目を迎えた家庭部会意見・体験発表大会は、「全道の高等学校で家庭・福祉を学んでいる生徒が、日頃の学習で学んだことの成果について、意見や体験を発表するとともに、生徒相互の交流を通して、『生きる力』を育み、家庭・福祉教育の充実を図る」ことを目的に実施しています。

今年度は9月19日(金)に本校を会場として開催されました。当日は来賓として学校教育局高校教育課前野文繁主査をお迎えし、市立函館高等学校佐紺摂子校長先生をはじめとする3名の校長先生方が審査を行い、7名の生徒が発表を行いました。

今年度はやや参加者が少なかったですが、いずれの内容も、「家庭・福祉」の授業や実習・体験・ホームプロジェクトなどを通して、自分の進路や夢・生き方につなげた発表でした。どの発表も、多様化した社会の中で、主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる家庭・福祉教育の「生きる力」を感じることができました。また、今年度は発表終了後、本校の家庭クラブ役員が進行・講師役を務めてフェザーデニムのキーホルダー制作を行い、参加者の交流を深めることができました。

今年度参加された各校の生徒の皆さん、ご指導をいただいた先生方には深く感謝申し上げます。来年度もより多くの生徒が参加できるよう、ご理解・ご協力のほど、よろしく願いいたします。

2 大会参加者

(1) 剣淵高校 北田 太希

「命の終わりにみる景色」

(2) 三笠高校 城守 喜湖

「食のプロフェッショナルをめざして」

(3) 余市紅志高校 冨坂 凌斗

「介護施設での学び」

(4) 当別高校 福島 李理

「学校生活と私の夢」

(5) 清水高校 奥田 杏

「夢がきまって・・・」

(6) 江別高校 長峰 千明

「ランウェイで見つけた新しい私」

(7) 置戸高校 高橋 彩那

「傾聴ー想いのかけ橋ー」

3 大会結果

最優秀賞 (産振推薦) 置戸高校 高橋 彩那

優秀賞 (産振推薦) 当別高校 福島 李理

優秀賞 江別高校 長峰 千明



第13回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会 に参加して（総合学科）

発表者 北海道清水高等学校 1年 奥 田 杏
指導者 北海道清水高等学校 教諭 柏 倉 早智子

1 生徒原稿「夢が見つかって・・・」

私は中学3年生の時、高校の進路決定にとても時間がかかりました。それは、人と話しをしたり交流することが大好きで、地域のボランティア活動に積極的に参加してきましたが「将来は人の役に立つ仕事に就きたい」とぼんやりと考えていたからです。そんなある日、「人手不足が続く介護や福祉の現場、その現場で人材確保に取り組む」という番組を見ました。そこに映る笑顔のお年寄りと見つめ合う介護士さんに、私は心を奪われ介護福祉士になりたいと思うようになりました。そして、私が選んだ高校は、保健福祉系列のある総合学科の清水高校でした。

4月、私は介護福祉士になりたいという希望をもって、清水高校に入学しました。しかし、1年次のうちは福祉の授業がありません。学校で募集のあった通信教育のガイドヘルパーの講習会は、受講者が少なく、中止になりました。私のからだは、福祉の知識に飢えた、すかさずのスポンジでした。

6月、学校の掲示板に「医療介護連携研修会」の開催案内を見つけました。当日、会場には医師・看護師・理学療法士・作業療法士・介護士などの施設職員・学校の先生が座っていました。制服を着た学生は私だけでしたが、初めて聞く現場の話が新鮮で、必死にメモを取りました。特に利用者さんからの「ありがとう」の言葉が、介護士原動力になる、という話が一番心に響きました。私も早く「ありがとう」と言われるような介護士になりたいと思いました。

また、神奈川県グループホームでは、職員の結婚式を認知症の利用者さんや職員さんと手作りで行った、という話しも感動的でした。ですが、私は更にもどかしい気持ちになりました。

そんな時、家庭科の授業で、青年期について「自立への一步は自分を知ることである」と学びました。そして、高齢者のお世話をさせてもらう前に、やることあるのではないかと気づきました。

授業では、自己目標達成のための思考整理に使われるマンダラチャートを作成し、介護福祉士になるための自分の行動計画をマス目書き込んでいきました。そして、礼儀を身につける。正しい言葉遣いで話す。自分の意見を持つ。高齢者と多く関わるなど、たくさんやるべきことが見つかりました。

高校在学中は、受けられる資格試験に果敢に挑戦し、たくさん資格を取得します。そして、2年次からは「生活と福祉」という授業が始まります。多くの知識と技術を身につけ、私の福祉のスポンジをいっぱいにします。そして、「ありがとう」と言われる介護士をめざします。

2 生徒を指導して

生徒が自己実現していく過程に心を動かされ、一緒に準備をしてきました。この大会参加自体も、生徒の夢への一步に繋がると確信しています。そして、希望を持って入学してくる生徒たちに対して、期待を裏切らない授業をしなければならぬと、私自身の学びにもなりました。

体験発表大会の参加は、生徒や教員にとって大変良い経験の場であると期待しています。

第13回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会 に参加して（家庭部会）

発表者 北海道当別高等学校 家政科3年 福島 李理
指導者 北海道当別高等学校 教諭 磯部 幸恵

1 生徒原稿

私の夢は、子どもたちの心に寄り添える先生になることです。この夢のきっかけは、幼い頃に通っていた保育園の先生との出会いでした。

その先生はいつも笑顔で優しく、不安な時にはそっと声をかけてくれるような存在でした。その姿を見て、子どもたちの心に寄り添う大切さを実感し、「私もこんな保育者になりたい」と憧れるようになりました。

この夢を実現するために、私は保育のことを専門的に学べる北海道当別高校 家政科に進学し、保育コースを選びました。

高校生活では座学や実習、制作活動などを通して保育者としての基礎を一から身につける事が出来ました。

特に制作活動では幼児向けの教材を一から丁寧に作りあげることで、創造する楽しさや自分が作った作品が子どもたちのところへ届く喜びを感じました。

また、高校2年生のときに地域の子育て支援サークルへ訪問しました。その時1歳の子どもからおもちゃを渡され、「食べるふり」をしてしまい、その子を泣かせてしまいました。その瞬間、自分の未熟さにショックを受けました。その日の夜に「子どもにとっておもちゃを渡すことは、特別な気持ちの表れだったのかもしれない」と振り返り、もっと自分が子どもの視点に立つべきだと痛感しました。

3年生では、より高度な内容に挑戦しました。大型絵本とペープサートを組み合わせた発表を行い、子どもたちに楽しんでもらおうと心を込めて準備をしました。しかし、発表後に園の先生から「ペープサートが子どもの気を散らし、

絵本に集中できてない子どもがいた」と指摘を受けました。この意見を聞いた時、今までの努力が報われなかったような悔しさを感じました。しかし、その一方で「子どもたちの段階に合わせた内容でなければ本当に伝えたいことが届かない」と気づき、改善の余地を実感しました。

また、運動会の練習に参加したことも印象に残っています。先生方が子どもたちの安全に気を配りながらも、全体を見守る姿はプロとしての責任感に溢れていました。

保育実習以外にも、高校1年生のときに陸上競技部を立ち上げるという大きな挑戦をしました。顧問の先生や部員を集め、必要な道具を揃えるなど、課題は多くありましたが、仲間と協力して乗り越えることができました。

この3年間を通して、私は多くの学びと成長を経験しました。保育実習や学校生活、部活動を通じて学んだ「子どもたちの心に寄り添うことの大切さ」や「人との協力・信頼の重要性」は、これから保育者を目指して進む私の大切な財産です。失敗や悔しい思いもありましたが、それらを糧に努力を重ねてきました。

これからは短期大学へ進学し、現場での経験を積みながら、夢を実現させていきたいです。そして、少子高齢化や保育士不足の時代だからこそ、子どもたちの心に寄り添い、安心できる環境を作り、保護者からも信頼される保育者を目指します。

2 生徒を指導して

生徒自身が高校生活を振り返り、保育者への夢がより強まり進路が明確になりました。さらに、北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に出場し、視野を広げることが出来ました。

第13回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会 に参加して・北海道置戸高等学校《福祉部会》

発表者 北海道置戸高等学校 2年 高橋 彩那
引率者 北海道置戸高等学校 教諭 三好 菜穂子

1 生徒原稿

「祖母の想いに応えたい！この想いをつなげていきたい！」

私が小学生の頃、祖母が認知症になりました。「一緒によくご飯を作って食べていたのに…」台所に立つことすらままならず、私や、母、周りにいる人たちのことを段々と忘れていく祖母の姿がありました。そうした姿を見て「何もすることができない」と無気力な気持ちだけが私の胸の中には残っていました。

月日が経ち、中学校3年生受験の時期、祖母と久しぶりの再会。祖母は私の顔を見て、「彩那ちゃん！」その言葉をきいたとき、心の中に温もりを感じたのと同時に、認知症になったとしても、祖母の私への想いは決して消えたわけではなかったことに気付きました。切ない気持ちと嬉しい気持ちが同時に湧き上がり、私の心の中を駆け巡りました。「祖母の想いをしっかりと受け止めたい！想いを伝えようとしてくれる人に応えられる人になりたい！」とそう強く思いました。そして、福祉を専門に学べる置戸高校を知り、迷わず進学を決めました。

高校入学後、福祉の勉強はとても新鮮なものでした。福祉の授業の中で、コミュニケーション技術という科目の授業があり、“傾聴”という言葉を知りました。“傾聴”は相手が「自分の話をちゃんと聞いてくれている」と感じることで、安心感が高まり信頼関係の構築につながる手法であることを学びました。

高校1年生の冬、5日間の施設実習が始まりました。利用者様I様という男性の利用者様と関わる機会をもちました。不安を抱えながらもI様に話し始めます。「I様の出身はどちらです

か？」「釧路だよ。お店は置戸町にあるよ」授業で学んだ傾聴の姿勢を思い出しながら私はI様の二言目を待ちます。「・・・なかなか話さないな。話すことが好きではないのかな？」と思いながら沈黙が続く中・・・。「何か良い話ないかね・・・？」私ははっとさせられました。「もっと自分から積極的にリアクション、質問をして、話を聞く姿勢を伝えよう！」そう決心しました。

翌日、次はA様という男性の利用者様と関わる機会を持ちました。「A様の趣味は何ですか？」「釣りだね。若い時はよく行ったものさ」「いいですね。ご友人とですか？」「いや、一人でだよ」「そうなのですね、他に好きなことや趣味はありますか？」「車が好きだよ。学生時代はよく悪いことをしたものさ」次々と語り出すA様に私はその一言一言に耳を傾けながら嬉しさとおたたかきで胸がいっぱいになりました。

祖母が私に伝えた想いを、次は私が誰かの心に灯す番だと思っています。その想いを胸に、私は日々利用者様に寄り添いながら、一緒に今後の幸福を考えられるような介護福祉士になりたいです。“福祉を通じて想いをつなぐ”私はその言葉のように、人と人が寄り添い、心を通わせ、そして未来へ向けて共に歩んでいきます。

“人と人をつなぐ想いの架け橋へ”以上で終わります。

2 生徒と共に学び

大会に出場し、高橋さんは相手に分かりやすく伝える力や、責任を持って行動する姿勢を身につけることができました。また、他校の生徒の皆さんの発表を通じて多様な価値観に触れることができ、視野を広げることもできました。高橋さんの今後の更なる成長を期待しています。

第 63 回北海道高等学校教育研究大会

教科別集会家庭部会を終えて

北海道石狩翔陽高等学校 教諭 北村 仁美

令和 8 年 1 月 8 日（木）札幌エルプラザ 4 階大研修室において全道から 58 名の参加者が集い、研究主題「生涯を見通してよりよい生活を創造する力を育む家庭科教育」のもとに開催した。

1 総会

令和 6 年度事業報告・決算報告・会計監査報告、令和 7 年度事業計画・予算案が承認された。令和 8 年度研究主題は、役員会・運営委員会に一任され、研究紀要執筆地区について確認した。

2 講演・演習

演題：「家庭科における ICT を活用した授業の推進」

講師：北海道教育庁 ICT 教育推進局 ICT 教育推進課 ICT 教育指導係 主任指導主事 兼 学校教育局高校教育課主任指導主事

洞 防人 氏

背景には学習指導要領と GIGA スクール構想があり、AI や先端技術が普及する Society 5.0 や人生 100 年時代において、多様な生徒の可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が急務となっている。Google スプレッドシートを用いたライブプラン作成や生成 AI（Gemini、NotebookLM、Canva 等）を用いた教材作成を体験した。入力データを AI に学習させない「オプトアウト設定」の徹底に加え、設定後も生徒の個人情報や機密情報はサーバーに残るため入力しないという、高度な情報リテラシーとセキュリティ遵守が必要である。総じて、教員自らが AI の特性を実体験として理解し、家庭科の専門性を活かした「現場発の活用事例」を積み上げ、共有していくことの重要性を強調する内容となった。

3 研究協議

(1) 研究発表

主題：「Google Apps Script を利用した主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」

発表：北海道平取高等学校 教諭 秋田 直也
多様な課題を抱える生徒の意欲向上を目指し、

Google Apps Script を用いて生徒の学びを蓄積・可視化し、スプレッドシートを使って教員と双方向のフィードバックを実践した。ICT を用いることで生徒は見通しを持ち、教員は生徒の成長を時間軸で捉えられた。教科単元を切り口に生徒の興味関心をいかに深めるかは時代が変わっても変わらないと感じた。

(2) 研究協議

「生成 AI の活用」「ICT 活用の実践について」について、各学校での取り組み等の研究協議が行われた。

(3) 講評

北海道教育庁上川教育局教育支援課学校教育指導班（高校教育担当）

指導主事 荒 嘉律 氏

主体的・対話的で深い学びを授業の中に仕組み化して進化させていくことが求められている。ICT を生徒の実態に応じて学習の効率と効果を高めるための「手段」として活用してほしい。文部科学省のホームページ 12 月 25 日に公表された家庭科の資質・能力の育成及び高校の科目構成のあり方について資料提示、説明があった。

4 研究紀要

タイトル：「フードデザイン」の探究的な学びによる生徒と地域の変容について ～2年間の白花豆プロジェクトの活動を通して～
執筆：北海道北見緑陵高等学校

教諭 平 子 実 里

初任段階研修 I 年次研修（高等学校）に参加して

北海道三笠高等学校 教諭 茂木 優奈

1 令和7年度初任段階研修について

(1) 概要

本年度の初任者研修を通して、教員としての基礎的な力量を高めるための多面的な学びを得ることができた。教科指導、生徒指導、学級経営など、日々の授業実践に直結する内容を扱いながら、教員としての在り方を見つめ直す貴重な機会であった。第Ⅰ期と第Ⅱ期に分割し、それぞれオンデマンド研修、遠隔研修、集合研修で段階的に学ぶ形式は、自身の成長を振り返りながら学習を深めるうえで非常に効果的であったと感じている。

(2) 第Ⅰ期

第Ⅰ期のオンデマンド研修や遠隔研修では、生徒指導や授業づくりに関する基礎的な学びを得た。また、集合研修では生徒指導の演習・協議を行い、教室で実際に起こりうる場面設定のもとに、生徒への声かけの仕方や状況判断のポイントを学び、現場での対応を具体的にイメージすることができた。また、指導案作成の研修では、目標の立て方、評価との整合性、展開の仕方など、授業設計の基本原則を学んだ。その結果、自身の課題が明確になり、日々の授業を見直す良い機会となった。

(3) 第Ⅱ期

第Ⅱ期の研修では、初任者の家庭科教員を対象とした遠隔研修が行われ、第Ⅰ期に作成した指導案を共有し荒指導主事から添削を受けた。専門教科の観点から具体的な助言をいただけたことで、指導案の構造をより精緻に見直すことができた。特に、生徒のつまずきの予測や問いの質の重要性など、授業改善に直結する視点を獲得することができた。また、集合研修では家庭科だけでなく、多様な教科の初任者が集まり、授業実施報告やその振り返りを共有し、助言し合

うことができた。他教科の授業づくりや生徒との関わり方を知ることで、自身の授業に取り入れられる視点が増え、指導の幅が広がったと感じている。また、多様な教科の初任者同士で「より良い授業となるためには何が必要か」を話し合い、自分では思いつかないような実践例を得たことで授業観が広がっただけではなく、自身を成長させる機会にもなったと感じている。

2 研修での学び

研修全体を通して学んだことは、授業の方法を多角的に捉えられるようになったことである。導入段階で生徒の関心を引く方法、主体的な学びを生み出すための問いの設定、生徒同士の学び合いの仕組みづくりなど、授業をより効果的にするための視点が増えた。また、授業だけではなく、生徒との日常的な関わり方や学級経営の在り方についても視野が広がった。特に、生徒の不安にどのように寄り添うか、学習意欲を高めるためにどのような環境を整えるかといった点について、多様な教科の実践から学ぶことが多かった。これらの学びは、自身の視野を大きく広げるとともに、コミュニケーション能力の向上にも繋がると感じている。

3 教員としての今後の目標

今後は、生徒が「生活を豊かにするための大切な知識や気づき」を得られるような授業を行うことが私の目標である。そのためには、家庭科だけではなく、教科横断的な学習を取り入れながら、生徒がより良い生活をするための選択肢を増やせるようにしていきたい。そして、生徒が心身ともに健やかで豊かな生活習慣を確立し、主体的に未来を創造する姿勢を育てるために、日々の教材研究や授業の振り返りをより一層充実させ、常に学び続ける姿勢を持ち続けていきたい。

中堅教諭資質向上研修（高等学校）

第Ⅰ期・第Ⅱ期研修教科別部会（家庭科）に参加して

北海道網走南ヶ丘高等学校 教諭 安田 三奈

1 研修の目的と概要

本研修は、教育公務員特例法第24条に基づき、中堅教諭として必要な資質能力の育成・向上が図られるよう、講義や協議、演習等を通じて職務の遂行に必要な実践的能力を育成することを目指し、オンデマンド配信やオンライン研修により実施された。

2 日程

第Ⅰ期 オンデマンド研修(夏季休業間まで)
遠隔研修（2025年7月2日（水））

第Ⅱ期 オンデマンド研修(遠隔研修前まで)
遠隔研修（2025年10月2日（木））
遠隔研修（2025年12月3日（水））

3 研修内容

(1) 第Ⅰ期 遠隔研修

管内の公立小学校、中学校、義務教育校、特別支援学校の教諭等が参加し、Zoomによる遠隔での研修が実施された。

- ①教職員の不祥事防止
- ②教職としての資質向上に向けて
- ③学校組織マネジメントとミドルリーダーの役割
- ④学習指導
- ⑤生徒指導

以上の内容について、講義・演習・協議が行われ、Googleドキュメントやスプレッドシートを活用して、自校の取り組みや課題を共有した。ミドルリーダーとしての役割を踏まえた自らの課題に向き合う有意義な時間となった。

(2) 第Ⅱ期 遠隔演習

オホーツク、十勝、釧路、根室地区の高等学校及び特別支援学校の教諭が参加し、Zoomによる遠隔での研修が実施された。実施内容は以下の通りである。

- ①ミドルリーダーとしての役割
- ②生徒指導
- ③特別支援教育
- ④キャリアデザイン

第Ⅰ期の研修後に、組織的な生徒指導の在り方について課題設定シートを活用し、3つの課題の中から1つを選択して各自で実践した取り組みを発表し、協議した。学校の規模や学力に違いはあっても教員が組織的に連携し、チーム学校として対応する重要性を確認することができた。

(3) 第Ⅱ期 遠隔研修（教科別研修）

Zoomによる遠隔での研修が実施され、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」及び「授業実践の共有」について、講義、協議、発表を通じて理解を深めた。各自が作成した「単元の指導と評価計画」「1単位時間の学習指導案」を、プレゼンテーション資料を活用して発表し合い共有したことで、ICTの活用方法や評価基準の設定の仕方、対話的な学びの実践例など意見交換することができた。

4 おわりに

本研修に参加し、日々変化する教育環境に対応するため、改めて学び続ける姿勢を大切にしていきたいと感じた。AIやICT、地域連携などを有効に活用しながら、生徒たちがより良い生活を築いていけるよう、家庭科教育の充実を目指して今後も精進していきたい。

令和7年度 産業・情報技術指導者養成事業に参加して

北海道江別高等学校 教諭 狩野千賀子

1 はじめに

家庭科教育の最新の動向を把握し、自校の授業改善に生かすことを目的として、本研修に参加しました。特に、被服分野の指導方法の整理や、金融教育・DX・保育など多領域にわたる家庭科の現代的課題への理解を深めることを意図しました。

2 研修内容の概要

(1) 8月18日：家庭科教育の基盤的研修

学習指導要領のよりよい実施に向けた講義では、教育課程の今日的課題が提示され、家庭科に求められる視点を整理することができました。

また、金融経済教育の講義では、消費者教育の強化が急務であることを再確認しました。

午後には、家庭科教員としての在り方や、札幌北高校の学校家庭クラブ活動の実践報告があり、自校の取組を見直す機会となりました。

(2) 8月19日：被服領域の専門性向上研修

杉野服飾大学において、SDGsとファッションの関係について講義を受け、衣生活指導を社会課題と結び付ける視点を学びました。続いて、各国の衣服の形から地域文化を理解する実習や、衣裳博物館の見学を通し、生徒の探究活動に発展できる素材が多数得られました。

午後のスカート製図と製作実習では、基礎から工程を再確認し、生徒指導でつまづきやすい部分が明確になりました。最後のデザイン画演習では、描き方・着色方法を実践的に整理でき、実技指導の幅が広がる内容となりました。

(3) 8月20日：家庭科×DX・保育分野の学び

「家庭科×DX」の講義では、デジタルを活用した学習の可視化や教材開発の可能性が示され、自校でも導入可能な視点を多数得ました。保育

の指導に関する講義では、子どもの発達を踏まえた活動設計の重要性が示されました。最後にまとめと研究協議を行い、3日間の学びを振り返りました。

3 研修を通して得たこと

今回の研修では、家庭科が扱う領域の広さと社会との繋がり的重要性を改めて認識しました。

被服分野では基礎技能を整理し直すことができました。特に、民族衣裳のパターンを基に実際に製作まで行う実習は、服飾文化の授業改善に直結する学びとなりました。その他、生徒主体の活動設計について具体的なイメージを得ることもできました。金融教育、SDGs、DXなどの横断的テーマについても、教育内容として扱う際の視点をつかむことができました。

なかでも、平安女学院大学こども教育学部学部長 教授 塩見知利氏のお話からは、ちょっとした工夫で子どもたちの創造力がどんどん引き出されていくことを知り、保育の授業づくりのヒントをたくさん得ることができました。家庭科には、ものづくりを通して知識や技術に加えて、創造する楽しさを伝えられる魅力があることを、改めて感じました。

4 今後の活用

今回の研修で得られた知見は、生活デザイン科の授業全体に広く生かせる内容でした。被服製作に関わる科目の授業改善をはじめ、探究活動や家庭クラブ活動の充実、金融教育の位置付けの整理、デジタルを活用した教材づくりなど、学校全体に還元できる学びが多くありました。

これからも、学び続ける教員として、この研修で得た学びを生徒一人一人の成長につなげていきたいと考えています。

V 福祉教育等に関する報告

第23回「福祉に関する教科・科目設置校研究協議会」を終えて

第23回「福祉に関する教科・科目設置校研究協議会」

主管校 北海道留寿都高等学校 校長 治田 理 知

- 1 開催日 16:00 全道福祉校長会（研修2と同展開）
令和7年11月20日（木）～21日（金） 18:30 教育懇談会
- 2 会 場 (2) 11月21日（金）
北海道留寿都高等学校 9:20 基調報告
虻田郡留寿都村字留寿都179番地1 【令和7年度 全国福祉高等学校校長会 第29回
総会・研究協議会並びに福祉担当教員等研究協
議会（愛媛大会）報告】
- 3 内 容 報告者：全国福祉高等学校校長会 北海道理事
北海道留寿都高等学校長
治田 理 知
- (1) 11月20日（木） 9:45 研究授業【社会福祉基礎】
13:00 開会式 授業者：北海道留寿都高等学校
教諭 岩 藤 真一郎
- ① 主催者挨拶 10:45 研究協議
北海道高等学校長協会家庭部会長 助言者：函館大妻高等学校長
北海道江別高等学校長 箕浦 真人 齊 藤 賢 一 様
- ② 来賓挨拶 11:50 閉会式
留寿都村教育委員会教育長 ① 主催者挨拶
佐々木 利明 様 北海道高等学校長協会家庭部会長
（一財）全国高等学校福祉教育振興会理事 北海道江別高等学校長 箕浦 真人
函館大妻学園 理事長 池田 延己 様 ② 主管校代表挨拶
北海道留寿都高等学校長 治田 理 知
- ④ 来賓・講師紹介 4 参加者 31名
主管校 校長 治田 理 知
- 13:20 研修1 例年より早めの降雪があった中、釧根・オホ
【ビューティタッチセラピー】 ツク地区からなど、遠方からご参加してくだ
社会福祉法人 溪仁会 さった方々を含め、道内各所から多くの先生た
地域密着型介護老人福祉施設 るすつ銀河の杜 ちにお集まりいただきました。
施設ケア部生活支援課主任 高橋 めぐみ 様 各研修では、情報交換をはじめ、ペアワー
ク・グループワーク等、大変な盛り上がりを見
せ、参加者の皆様の主体的な姿勢と高い意識、
運営協力のもと、大変充実した研修を行うこと
ができました。
- 15:20 意見交換
- 16:00 研修2
- 【介護技術コンテスト報告】
- ① 第10回 北海道高校生介護技術コンテスト
報告者：北海道置戸高等学校
教諭 野村 太 一
- ② 第35回 全国産業教育フェア福島大会
第12回 全国高校生介護技術コンテスト
報告者：北海道留寿都高等学校
教諭 山形 孝 宏

第 10 回北海道地区高校生介護技術コンテストを開催して

当番校

北海道置戸高等学校 教諭 大森 涼太

1 コンテストを終えて

今年度は 10 回目という節目を迎えた北海道地区高校生介護技術コンテストは、「福祉を学ぶ生徒が介護技術を高めるとともに、様々な介護場面に対して適切かつ安全に支援できる能力を育成する」ことを目的とし、8月29日（金）に当別町にある北海道医療大学にて開催しました。参加校も増え、福祉施設関係者や福祉系高校の関係者等、総勢約 150 名を超過する人数が来場しました。また、コンテストを配信することで、多く方に視聴していただきました。今大会は前年度北海道石狩翔陽高等学校が全国大会最優秀賞を受賞したことで北海道地区から 2 校が全国大会出場することができます。

今年度、モデル役を北海道介護福祉士会の阿部友紀様、審査員を北海道介護福祉士会理事の岩村学様、北海道医療大学の高橋由紀様に審査をしていただきました。

事例（次ページに掲載）の置戸鹿寿子さんの心身の状態を踏まえた声掛け、エビデンスに基づいた自立支援、自己決定や個人を尊重した介助の実施、介護者同士の連携等を審査の観点として評価していただきました。

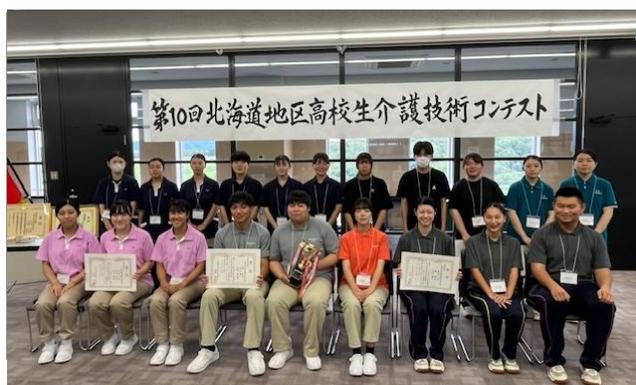
閉会式での講評の中で、「毎年、レベルが高くなっている。どの学校も僅差で確実にコミュニケーション力や介護技術・利用者への気づかいなどは高い」と講評いただき、北海道地区のレベルの高さを感じました。

また、最優秀賞に輝いた北海道留寿都高等学校、優秀賞の北海道石狩翔陽高等学校は、10月に行われた全国高校生介護技術コンテストの北海道代表として出場し、北海道代表として堂々と介助していました。

このコンテストを開催するにあたり、飲食物や宿泊先の提供等、多くの後援、協賛を賜りましたことを心からお礼申し上げます。

2 コンテスト結果と参加校

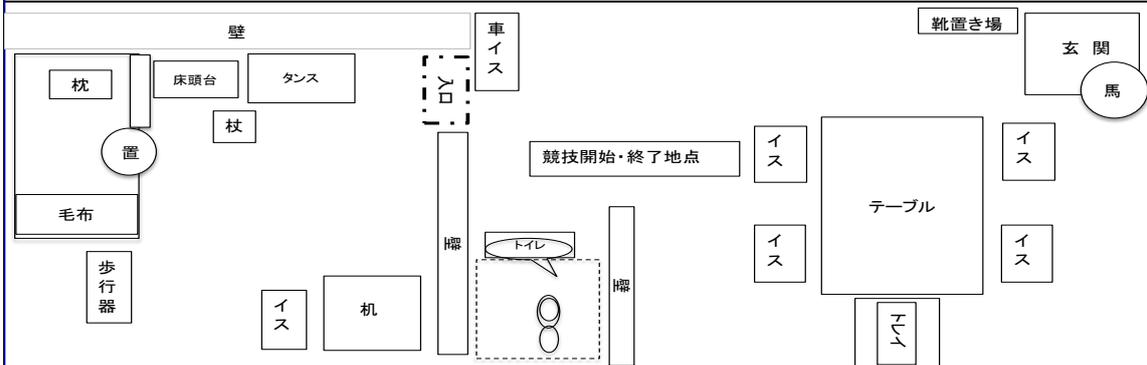
	学校名	生徒名
最優秀賞	北海道留寿都高等学校	楠 祐月 佐々木 零 三船 亜衣李
優秀賞	北海道石狩翔陽高等学校	飛鳥 日渚 郡 瑞妃 野村 遥斗
奨励賞	北海道置戸高等学校	川村 侑衣花 舟根 紗来
	北海道釧淵高等学校	阿部 未徠 大西 杏奈 山本 海咲
	北海道余市紅志高等学校	大森 優汰 片石 碧 坂田 梨緒奈
	函館大妻高等学校	石倉 心美 高本 絢菜 佐竹 結衣
	北海道栗山高等学校	金泉 結空 竹田 沙優 石渡 帆夏



第10回北海道地区高校生介護技術コンテスト 課題

課 題	<p>置戸鹿寿子さん（おけと かずこさん 70歳女性）は、1年前に脳梗塞により、右片麻痺になりました。本人の希望で自宅に戻ることになりましたが、段差が多いことから家族との相談のうえ、リハビリが必要だと決まり、介護老人保健施設Aに入所しました。入所して以降、日常生活の中では、食事や排泄などは一部に介助が必要ではあるもののある程度の行為自体は一人で行うことができます。しかし、最近服を着る際にも一部介助が必要になり、コミュニケーションの難しさから、友人と約束していた外出の時間に準備が間に合わないということが起きるようになっていきます。現在、10時の水分補給を終え、居室でゆっくりしている状態です。今日は、以前より約束されていたご友人の馬場かのこ（ばんば かのこ）さんとの外出レクが控えています。幼馴染のご友人との食事ということでとても楽しみにされています。予定の時間まであと30分ほどという状況です。置戸鹿寿子さんに外出のため、服を着替えてもらい、外出準備をして玄関まで案内してください。</p>	
	健康状態・心身機能・身体構造	<ul style="list-style-type: none"> ・脳梗塞に伴う右片麻痺（右利き） ・失語症（感覚性失語） ・脳血管性認知症 ・要介護1 ・認知症高齢者の日常生活自立度 IIa ・障害高齢者の日常生活自立度 A-1
	参加	<ul style="list-style-type: none"> ・外出して施設の花壇を見ることや少し遠くまで散歩に行くことを楽しみにしている。毎週の外出レクも楽しみにしている。 ・友人が多く、よく友人や家族と電話をする。たまに会話が通じない部分が見られる。職員がジェスチャーを使い、わかりやすく伝え直すこともある。
	活 動	<p>移動：歩行時は日によって調子の波があり、ややフラつきが見られることもあるため、トイレや食事の際の短距離の移動については多点杖もしくは歩行器を使用している。外出などの長距離の移動は車椅子を使用している。</p> <p>食事：自助具を使い自力摂取している。時折、自身の自助具がわからなくなる。また、口腔内に食物残渣が見られる時がある。自助具を使用しない時は一部介助が必要。</p> <p>更衣：自力で着替えることが難しい。声かけをしても着方がわからないときがあるため一部介助が必要となる。</p> <p>排泄：尿意・便意ともに感じられる。ズボンの着脱に時間がかかり時折失敗することもあるため、一部介助が必要となる。</p>
	個人因子	<ul style="list-style-type: none"> ・C町出身。結婚後は夫と農家を65歳までしていた。 ・20歳で結婚し、25歳で息子を授かった。 ・入所前は、夫と息子夫婦、孫と生活していた。 ・料理が得意で毎日食事を楽しみにしている。 ・裁縫が得意だったこともあり、日中にはリハビリで自助具を活用して編み物をしている。 ・優しい性格で面倒見がよく、話すことも好きで、自分から職員に話しかけているが言語障害により、うまく会話が通じないこともあり、不安を口にすることが多くなった。
	環境因子	<ul style="list-style-type: none"> ・介護老人保健施設入所（個室） ・居室にはタンスの上には家族の写真が飾られている。 ・毎週末、必ず夫が面会に来る。また月に一度は息子夫婦と孫も面会に訪れるなど家族関係は良好である。 ・家族とは出来る限り毎日会いたいと思っている。 ・友人の馬場さんとは家族ぐるみの付き合いをしている。馬場さんも入居しており、介護士とも顔見知りで、外出レクを通じて食事にもよく行っている。
使用できる物品	<p>【居室】 ・車椅子1 ・ベッド1 ・シーツ1 ・ベッドマット1 ・介助パー1 ・歩行器 ・多点杖 ・ベッドサイドレール1 ・床頭台1 ・机 ・イス ・鏡（机の上） ・化粧品（机の上） ・タンス ・洋服（長袖・半袖） ・カーディガン ・カバン（大きさが違う物が2つ） ・帽子（2種類） ・スカーフ ・靴 ・老眼鏡 ・財布（がま口） ・自助具</p> <p>【トイレ】 ・ポータブルトイレ（据え置き型の便器と仮定）1 ・使い捨て手袋2 ※ 手すりやその他備品はあると仮定してください。</p> <p>【食堂】 ・手指消毒用アルコール1 ・ふさん（テーブル用）1 ・コップ ・自助具のスプーン（3種類） ・飲み物</p>	
補 足	<ul style="list-style-type: none"> ・居室やトイレの壁はすべてビニールテープで示しています。 ・当日の天気は晴れ、気温27度、湿度48%、夕方から曇りの予報。 ・友人との外出は施設から500m離れた喫茶店に行くことになっている。 ・外出レクは別の職員が同行するため、玄関で引き継ぐ。外出レクの際は介助者が車イスを押す。 	

会場イメージ図



第12回全国高校生介護技術コンテスト優秀賞、全国福祉高等学校校長会理事長賞を受賞して

第10回北海道地区高校生介護技術コンテスト最優秀賞受賞校

北海道留寿都高等学校 引率教諭 西山らな 福祉部長 山形孝宏

1 大会概要

10月26日(日)、第35回全国産業教育フェア福島大会「第12回全国高校生介護技術コンテスト」が福島県伊達市にある聖光学院高等学校にて開催され、本校を含めた各地区大会を勝ち抜いた全11校の高校生が出場しました。

1ヶ月前にモデルとなる利用者の基本情報(健康状態、心身の状況、趣味や家族構成等)や使用物品、会場図などが事前課題として提示され、各校はその情報をもとに、適切なケアの方法を考え、校内での練習に取り組みます。

大会当日には追加の課題が発表され、25分間の検討時間の後、競技へと移ります。

競技は課題に対する介護技術(7分間)と介助の根拠や工夫点といったアピールポイントの発表(2分間)で行われます。

【事前課題】

佐賀とみ子様(1943年生)は、物忘れが頻繁にみられる82歳の女性です。長男の結婚後は夫と二人暮らしになりました。5年前に夫が脳梗塞を発症し、1年間介護をするが他界、一人暮らしとなりました。3年前に転倒が原因で右大腿部頸部骨折し、人工骨頭置換術を受けました。その後パーキンソン病と診断されました。1年前に脳梗塞が発症し、入院。退院後は、長男家族と同居。長男夫婦は共働きで、日中一人になるため3か月前からユニット型の特別養護老人ホームに入居しました。現在は、右足の痛みを訴えることが多く、車いすでの移動が多くなっています。

【当日課題】

現在の時刻は14時です。15時のおやつの前にリビングでレクリエーションを行うため、自室

で端座位になっている佐賀さんに声をかけて、リビングまでの介助を行ってください。

リビングについたら、1m程度の手引き歩行を行い、いすに座る介助を行ってください。そして、佐賀さんの意欲を引き出すレクリエーションを行ってください。

2 大会に参加して

本校は介護福祉士養成校で、4学年に在籍する2名の男子生徒が選手として、3学年の女子生徒1名が控え選手としてコンテストに出場しました。本校は全国大会への出場が初めてということもあり、当日の緊張を少しでも和らげるため、毎日放課後等の時間を使って様々なパターンの当日課題を想定し、練習に励みました。大会では男子生徒2名による「異性介護」という点から、体に触れる際の声掛けや配慮、術後の経過観察という点からの安心安全なケアの方法など、独自性を生かした発表をすることができました。各校様々なアイディアのもと、佐賀とみ子さんの心身状況や尊厳に配慮したケアの実践が見られ、生徒も教員も有意義な学びの機会になりました。大会結果は優秀賞(3位)という輝かしい成績を収めることもできました。

3 最後に

地区大会への出場から全国大会終了まで、留寿都村教育委員会様をはじめ、様々な福祉関係機関の皆様にも励ましのお言葉をいただきました。「優秀賞」という素晴らしい結果に繋がりました。この経験を後輩たちに引き継ぎ、本校で福祉を学ぶ本校の生徒たちの財産としていくとともに、次年度の地区大会でも良い発表ができるよう、生徒たちには日々の学習や外部実習での学びを大切にしてほしいです。

VI 各地区（ブロック）
家庭科研究会の
一年間の活動状況

空知管内

- ◇名称：空知高等学校家庭科教育研究会
- ◇運営母体：空知高等学校教育研究会
- ◇実施回数：1年に1回
- ◇会員学校数／管内学校数：22校／27校
- ◇会員教員数：48人（実習助手等含む）
- ◇次年度事務局校：北海道岩見沢緑陵高等学校

◆実施日 令和7年10月10日（参加者15名）

1 総会

- (1) 令和6年度 事業報告・会計決算報告
- (2) 令和7年度 事業計画案・予算案
- (3) 令和7年度 会員・規約の確認
- (4) 事務局ローテーションの確認
- (5) 令和8年度 研究会について

2 研修 ①「教科等横断的な学習の充実」

（担当）本校 定時制 家庭科担当 継田教諭
本校定時制における家庭科での実践をご紹介します。他教科との連携について、理科との連携について被服、調理それぞれの分野で紹介しました。

研修 ②「教科横断的な学習の実践」

本校定時制における理科と家庭科合同授業の実践をもとに、パンとジャムを調理しました。
会場：北海道滝川高等学校 大会議室、調理室

3 研究協議（各校の授業実践報告）



石狩管内

- ◇名称：北海道高等学校教育研究会
石狩支部家庭部会
- ◇運営母体：高教研石狩支部家庭部会
- ◇実施回数：1年に3回
- ◇会員学校数／管内学校数：31校／70校
- ◇会員教員数／管内教員数：40人／100人
- ◇次年度事務局校：北海道札幌南高等学校
- ◇研修テーマ：

「魅力的な家庭科の授業を目指して」

◆実施日 令和7年5月11日（参加者31名）

第1回研究協議会

- (1) 総会
- (2) 実践発表

研究主題「被服分野の学習内容について」

- ・札幌厚別高等学校 小田 美穂 教諭
- ・札幌啓成高等学校 米根 順子 教諭
- ・野幌高等学校 川上美知代 教諭
- ・江別高等学校 山田真規子 教諭

- (3) 研究協議・情報交換

◆実施日 令和7年10月21日（参加者24名）

第2回研究協議会

- (1) 施設見学「食と農業の未来について考える」
施設 農業学習施設 KUBOTA AGRIFRONT
- (2) 研究協議・情報交換

◆実施日 令和8年1月27日（参加者26名）

第3回研究協議会

- (1) 講演「命を守る1枚の風呂敷魔法」
講師 一般社団法人日本風呂敷文化協会
代表理事 横山 芳江 様
- (2) 研究協議・情報交換

後志管内

- ◇名称：令和7年度第44回後志管内高等学校家庭科研究会総会・研究協議会
- ◇運営母体：後志管内高等学校教育推進委員会
- ◇実施回数：1年に1回
- ◇会員学校数／管内学校数：15校／18校
- ◇会員教員数／管内教員数：21人／21人
(講師・助教諭等を含む)
- ◇次年度事務局校：北海道真狩高等学校

◆実施日 令和7年11月19日(参加者7名)

1 総会

- (1)本年度役員の確認
- (2)議長選出
- (3)令和6年度事業報告(小樽潮陵高等学校)
- (4)令和7年度事業(案)
- (5)会則の改正
- (6)確認事項
 - ・後志管内高等学校家庭科研究会組織と運営に関する申し合わせについて
 - ・令和8年度当番校、協力校について
 - ・令和8年度以降の全道家庭科研究協議会運営研究員について
 - ・令和9年度全道家庭科研究協議会司会及び令和10年度全道家庭科研究協議会提言の選出について

2 研究協議

～教科『家庭』における探究の『問いづくり』支援の在り方を考える～

助言者 蘭越高校 守田 英樹 校長

3 実技研修

日々の暮らしを彩るフラワーアレンジメント
～クリスマスキャンドルアレンジ～

講師 フランススタイルフラワーデザイナー
佐藤 祥江 様

胆振地区

- ◇名称：令和7年度胆振管内高等学校教育研究会家庭部会
- ◇運営母体：胆振管内高等学校教育研究会
- ◇実施回数：1年に1回
- ◇会員学校数／管内学校数：24校／24校
- ◇会員教員数／管内教員数：30人／30人
(実習助手等含む)
- ◇次年度事務局校：北海道鶴川高等学校

◆実施日 令和7年10月24日(参加者16名)

1 総会

- (1)事業報告(令和6年)
- (2)令和6年度決算報告・監査報告
- (3)令和7年度事業計画(案)
- (4)令和7年度予算(案)
- (5)令和7年度役員
- (6)連絡・その他
 - ①R7年度以降の管内事務局校の担当について
 - ②北海道高等学校家庭科研究協議会の提言者・司会者と運営研究員について

2 各校交流会

- (1)教科で実践している探究活動、地域と連携した探究的な学習活動の実践例について
- (2)家庭科教育において先生方が一番重きをおいている分野とその理由について
- (3)教科横断的な授業の実践例
- (4)家庭基礎での被服実習について
- (5)次年度研究会での研修内容について

3 研修会

「金融教育について～資産形成ゲームの活用(ボードゲーム実習)」

株式会社イー・ラーニング研究所

溝渕 聖二 様



日高地区

- ◇名称：日高管内高等学校家庭部会研究協議会
- ◇運営母体：日高管内高等学校家庭部会
- ◇実施回数：1年に1回
- ◇会員学校数／管内学校数：6校／7校
- ◇会員教員数／管内教員数：7人／7人
- ◇次年度事務局校：北海道えりも高等学校

◆実施日 令和7年10月30日（参加者7名）

1 総会

- (1) 令和7年度以降の当番校確認
- (2) 管内での情報共有方法確認

2 研修「大豆の脱穀、選別体験」

- (1) 講師 北海道静内農業高等学校
佐々木 成美 様
- (2) 内容 本校で生産している大豆の脱穀と選別作業を体験することで、生産について理解し食育に還元する。

3 研究協議

「実習で扱う題材について」

- ・アレルギーに対応した献立の検討
- ・高齢者疑似体験
- ・色覚障害に配慮した実習方法等

多様な生徒がいる中、実習で扱う題材についても学年の特性や生活背景に配慮した選択が求められてきている。

また、初任段階教諭が増えており、各校での取り組み状況や困り感を解消するため、情報共有の手段としてGoogleClassroomを活用することとなった。



渡島・檜山地区

- ◇名称：令和7年度渡島・檜山地区高等学校家庭科部会研究協議会
- ◇運営母体：渡島・檜山地区高等学校家庭科部会
- ◇実施回数：1年に1回
- ◇会員学校数／管内学校数：28校／28校
- ◇会員教員数／管内教員数：35人／35人
- ◇次年度事務局校：清尚学院高等学校

◆実施日 令和7年10月29日（水）
（参加者18名）

1 総会

- ・会則確認
- ・令和6年度決算報告・会計監査報告
- ・令和7年度予算案審議
- ・令和8年度以降の本会当番校確認
- ・令和8年度以降の運営研究員確認

2 研究協議

各校の現状と課題について、実践内容の紹介を中心に意見交換を行った。

- ・保育実習における製作物について
- ・調理実習時の生ゴミ処理方法について
- ・防災教育について
- ・興味・関心を持たせる教材について

3 研修講座

「将来に備えるお金の話」

(1) 講師

SMBC コンシューマーファイナンス
株式会社 社会的価値創造推進部
金融経済教育グループ（札幌）

グループ長 山北 享 様
谷 崎 大治郎 様

(2) 内容

主に資産運用についてご講演いただいた。また、「投資体験ゲーム」をとおして投資を行うことによる資産変動について疑似体験をし、資産運用に対する学習を深めるとともに、今後の授業の方向性を示すご助言をいただいた。

上川・名寄地区

- ◇名称：上川管内高等学校教育研究会
教務部会家庭分科会
- ◇運営母体：上川管内高等学校教育研究会
- ◇実施回数：1年に2回
- ◇会員学校数／管内学校数：25校／30校
- ◇会員教員数／管内教員数：40人／40人
(実習助手等含む)

◇次年度事務局校：北海道上富良野高等学校

◆実施日 令和7年5月26日(参加者27名)

1 総会

2 研修・研究協議

研修① 調理実習 ベシヤメルソースの活用法

研修② 講義 在庫となる食材や調味料の活用
法について

講師 学校法人浅井学園 旭川調理師専門学校

張江 幸智様 吉田 志織様

研修③ 講義 高等学校家庭科消費生活領域
における授業検討

講師 北海道教育大学旭川校教授

川邊 淳子様

調理実習後、小中学校の学習内容を確認しながら消費生活の講義を受けた。

◆実施日 令和7年8月8日(参加者19名)

研修①「思考・判断・表現に関する考查問題
(単元テスト)のあり方と授業実践について」

講師 上川教育局 荒 嘉律 指導主事様

研修②「家具専門家が語る家選びのポイント
と豊かな住まいの在り方について」

講師 有限会社エフ・ドライブデザイン

代表取締役 木田 尚史様

研修③「旭川デザインの魅力から考える持続
可能な住まいについて」

講師 旭川デザインセンター マネージャー

坂本 庸司様

思考・判断・表現に関してグループ協議を交えながら研修し、旭川デザインセンターに場所を移して持続可能な住まいについて学んだ。

留萌管内

- ◇名称：留萌管内高等学校家庭科教育研究会
- ◇運営母体：留萌管内高等学校教育研究会
- ◇実施回数：今年度は実施なし
- ◇会員学校数／管内学校数：3校／7校
- ◇会員教員数／管内教員数：3人／3人
- ◇次年度事務局校：なし
- ◆実施日 未実施

令和7年度の留萌管内高等学校家庭科教育研究会についてご報告いたします。

当管内における家庭科教員数は、令和5年度に4名、令和6年度には3名と減少傾向にあります。こうした現状を踏まえ、管内単独での研究会開催よりも、他地区との連携を図ることが教員の資質向上に資するとの判断に至りました。その結果、令和7年度より、留萌管内の家庭科教員は上川・名寄地区の研究会に合流させていただくこととなりました。

今年度は、先行して羽幌高等学校の教員1名が上川・名寄地区の研究会に参加いたしました。他地区の教員との交流は、専門性の向上のみならず、家庭科教員同士のネットワーク構築という面でも非常に貴重な機会となりました。

今後も引き続き、広域的な連携を通じて研鑽を積むことが、留萌管内の家庭科教育のさらなる充実と教員の成長に繋がると考えております。

宗谷管内

◇名称：宗谷管内高等学校教育研究会家庭部会
研究協議会

◇運営母体：宗谷管内高等学校教育研究会

◇実施回数：隔年

◇会員学校数／管内学校数： 7校／7校

◇会員教員数／管内教員数： 7人／7人

◇次年度事務局校：北海道礼文高等学校

◆隔年での実施のため、来年度実施予定

オホーツク地区

◇名称：オホーツク管内高等学校家庭科教育研究会

◇運営母体：オホーツク管内高等学校高等学校
家庭科教育研究会

◇実施回数：1年に1回

◇会員学校数／管内学校数： 22校／26校

◇会員教員数／管内教員数： 22人／25人

◇次年度事務局校：北海道北見商業高等学校

◆実施日 令和7年11月7日（参加者11名）

1 総会

2 実技講習「ソーセージ加工」

講師 北海道大空高等学校

能祖一広氏、蒔田貴之氏

3 授業参観

北海道大空高等学校 教諭後藤あゆみ

家庭基礎1年次「食生活」

4 研究協議

テーマ「個別最適な学習指導のあり方」

授業参観を踏まえ、授業における新たな視点について交流した。

その後、「個別最適な学習指導のあり方」について検討した。個別最適化を進める上での各校の課題として、観点別学習状況の評価、教材の準備、生徒の学力差等があった。

また、学力差があるからこそ個別最適な学習指導が必要であるとの意見もあった。

成果を共有し、今後の授業改善や適切な観点別学習状況評価について各自で取り組むこととした。



十勝管内

◇名称：十勝管内高等学校教育研究会家庭分科会

◇運営母体：十勝管内高等学校教育研究会

◇実施回数：2回／年

◇会員学校数／管内学校数：21校／22校

◇会員教員数／管内教員数：33人／33人

(講師、実習助手を含む)

◇次年度事務局校：北海道足寄高等学校

◆実施日 令和7年6月4日(参加者18名)

(1) 総会

- ・令和6年度事業、決算、会計監査報告
- ・令和7年度会員、役員、事業案及び予算案
- ・次年度以降の当番校
- ・北海道高等学校家庭科教育研究協議会

(2) 研究協議会

テーマ「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

◆実施日 令和7年12月5日(参加者10名)

(1) 講演「コーヒーから学ぶこと～魅力～」

GREEN FIVE COFFEE 代表 鈴木 孝直 様



(2) 見学「帯広大谷高等学校 新校舎」



(3) 研究協議 テーマ「同上」

釧路地区

◇名称：釧路管内高等学校教育研究会

家庭科部会

◇運営母体：釧路管内高等学校教育研究会

◇実施回数：1年に1回

◇会員学校数／管内学校数：20校／20校

◇会員教員数：23名(実習助手等含む)

◇次年度事務局校：北海道釧路工業高等学校

◆実施日 令和7年11月26日(水)

(参加者14名)

1 総会

- (1) 令和6年度事業報告について
- (2) 令和7年度事業計画(案)について
- (3) 釧路管内高等学校教育研究会家庭科部会当番校輪番(案)及び、北海道高等学校家庭科教育研究協議会運営委員輪番(案)について
- (4) 釧路管内高等学校教育研究会各教科活動助成費について
- (5) 令和7年度役員について

2 講演

演題 「乳幼児期の手指と触覚に働きかける玩具」

講師 児童発達支援センター

専門員 下山 千穂 様

主 査 玉川奈央子 様

3 研究協議「各校の家庭科教育について」

4 授業「幼稚園交流学习 成果発表会」

事前説明 北海道阿寒高等学校 大杉 志織

助言者 釧路市認定こども園阿寒幼稚園長

山崎 綾子 様



VII 特別寄稿

不易と流行

～家庭科教育の歴史と日本文化の継承～

北海道高等学校長協会家庭部会 監事

北海道野幌高等学校 校長 壽 浅 章 洋

この度、令和7年度末をもって、4年間にわたり務めてまいりました北海道高等学校長協会家庭部会の役員を退任することになります。73年という長きにわたる伝統を誇るこの家庭部会において役員として携わることができたことに、心より感謝申し上げます。

家庭部会は、家庭科教育の振興を通じ、子どもたちの健やかな成長と、大切な日本文化の継承を目的に、他に類を見ない全国的な活動を展開しております。その発展は、ひとえに歴代の会員校の皆様、そして情熱溢れる先生方のご尽力の賜物であり、改めて敬意を表する次第です。

私が役員として関わり始めた当初は、部会の広範な組織や、多岐にわたる部門の構成を理解するのに正直苦勞いたしました。しかし、その組織の大きさや、生徒の主体的な参画を積極的に進める取り組みの素晴らしさに触れるにつれ、大きな驚きと同時に、この伝統ある組織に真剣に関わらねばならないという、強い責任を感じるようになりました。

役員になった当時、大変お世話になった函館大妻高等学校の池田延己校長先生から教えていただいた「手の文化（教育）」という言葉は、私の生涯において忘れることはないと思います。これは、池田現理事長がお世話になった、大妻高校の設立者である外山ハツ先生の晩年、痴呆状態である外山先生が、無意識に裁縫するお姿を見て、知識だけではなく手が覚えたことは決して失われたいのだと気づかされたご経験から教えていただいた言葉です。その時、私は衣食住をはじめとする生活技術、すなわち「手で何

かを生み出し、手間をかける」という文化は、どんなに技術革新が進み、社会が便利になっても、日本人として、人間として大切にしなければならない「不易（いつまでも変わらないもの）」です。それを次の世代に継承することこそが、家庭科教育の最も重要な使命であると、改めて確信いたしました。

私自身、家庭科教育とは不思議な縁があります。私の祖母は伊達市で技芸洋裁学校を経営し、母もその学校で教師をしておりました。生活に根ざした知恵や技術を伝えるという教育の根幹を、幼少の頃から身近に感じてきたのかもしれませんが。また、私は長年剣道に励む中で、礼節や精神性といった日本文化の継承を何よりも大切にしたいと常々思っている一人です。

現在、教育のDX化は、多様な子どもたち一人ひとりに対する「個別最適な学び」を実現する大きな「流行（時代とともに変化するもの）」です。これは時代の要請であり、積極的に取り組むべき変革です。しかし、その一方で、デジタルでは代替できない、日本人として大切にしなければならない精神文化や生活文化の継承が、より一層必要とされています。

この「不易」を、めまぐるしい「流行」の中で次世代に繋ぎ、豊かな未来を創造していくこと。これからの高等学校教育において、その重要な役割を担うのは、他ならぬ家庭科教育であると確信しております。

4年間、皆様より賜りましたご支援、ご指導に対し、深く感謝申し上げますとともに、北海道高等学校長協会家庭部会のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。

編集後記「こですHOKKAIDO 2025」の発刊にあたり

令和6年度より高等学校新学習指導要領が全学年で完全実施となり、家庭科教育においても「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が、実践のフェーズへと移行しています。ICTを効果的に活用し、生徒がいかにして生活の中の課題を見出し、解決に向けた「見方・考え方」を深めていくか。私たち教員には、従来の経験則に捉われることなく、社会の変化を鋭敏に捉えた不断の研鑽と、自らも学び続けるリスキングの姿勢がこれまで以上に求められています。

本部会誌「こですHOKKAIDO」は、全道の家庭科教育の実践を繋ぐ貴重な記録として歩みを進めてまいりました。しかし、昨年度の本欄でも触れた通り、少子化に伴う専門学科の減少や統廃合が進む中、特定の担当校のみが多大な編集業務を担うこれまでの「当番校制度」は、もはや持続可能な仕組みとは言えなくなっていました。

この大きな課題に対し、今年度は大きな転換を試行いたしました。それは、従来の校内組織による編集から、全道各地の教頭・教諭から広く募った「編集委員会」による組織的な編集体制への移行です。物理的な距離を克服するため、Googleドライブ等のクラウドツールを全面的に活用し、オンライン上で共同校正や情報共有を展開しました。この試みは、業務の効率化のみならず、各地の委員が知恵を出し合う「協働的な学び」の場となり、正解のない時代における持続可能な部会運営の在り方として、一定の成果を収めることができたかと確信しております。

研究の本質とは、作成そのものをゴールとするのではなく、その土台を次なる一步への糧とすることにあります。本号に収められた多様な実践が、各学校での授業改善のヒントとなり、次年度のさらなる進化に繋がることを切に願っております。

終わりに、「こですHOKKAIDO 2025」の編纂にあたり、多忙を極める中、貴重な実践をご寄稿いただいた教員の皆様、本部会の新たな体制を支えてくださった各校長方、そして多大なご指導・ご助言をいただきました北海道教育庁をはじめとする教育関係者の皆様に、厚く御礼を申し上げます。編集委員会一同、全道の家庭科教育のさらなる発展を祈念いたしまして、発刊の挨拶とさせていただきます。

令和8年3月

「こですHOKKAIDO 2025」編集委員会

委員長 北海道当別高等学校長 保格 秀規

副委員長 北海道千歳北陽高等学校長 吉田 拓二

委員（教頭） 近藤麻理子（岩見沢農業） ・ 吉村佳名子（芦別）
委員（教諭） 佐藤奈央子（岩見沢東） ・ 中尾 綾（伊達開来）
松谷 良子（長万部） ・ 新屋 夏実（富良野）

北海道高等学校長協会家庭部会 こです HOKKAIDO 2025

発行日 令和8年3月31日
発行 北海道高等学校長協会家庭部会事務局
(北海道江別高等学校)
編集 北海道高等学校長協会家庭部会編集委員会

こです HOKKAIDO とは

「こ」 Collected papers …… 集 録
「で」 Domestic Science …… 家庭科
「す」 Studies …… 研 究

家庭部会が研修して、それをまとめあげる
こーして仕上げることを、**でかす**と解釈し
北海道は、「こーですヨ」 という意味です